

部門別紹介

診療部	看護部	診療支援部	事務部	直轄部門
外科 循環器内科 消化器内科 小児科 脳神経外科 糖尿病内科 麻酔科 救急科 眼科	看護部長室 外来 手術室・中央材料室 2階病棟 (外科・脳外・整形外科病棟) 3階西病棟 (内科・眼科・小児科病棟) 3階東病棟 (地域包括ケア病棟) 4階病棟 (回復期リハビリテーション病棟) 透析室 外来化学療法室 ナースエイド(看護助手)室	薬剤室 画像診断室 臨床工学室 臨床検査室 栄養管理室 リハビリテーション室 地域医療連携室 クラーク室	総務課 医事課 広報企画課	医療安全管理室 感染制御部 経営企画改善室 システム管理室



8月に開催される種子島最大の祭り「鉄砲まつり」には、私たち職員も大勢参加します。

診療部

外科

外科部長 松下 大輔

われわれ外科は常勤3名での診療を行っております。主に腹部外科(消化器外科)の診療を行っていますが、手術のみならず“がん診療”など幅広く行っています。甲状腺疾患や乳腺・胸部疾患なども大学病院などの専門機関と連携して診療を行っています。外科医は手術後の全身管理も行っているため、全身を診られる“Generalist:総合医”として一般救急での対応にも参画しています。

現在、外科手術は“低侵襲”の時代です。手術の傷を小さくするための鏡視下手術がその最たるもので当院でもほとんどの手術を腹腔鏡で行っています。さらには表面上の低侵襲だけではなく、手術を受けられる一人ひとりの病状・年齢・全身状態などを総合的に考慮した手術を行っております。腹腔鏡が普及する以前は、むしろ予防的にたくさん取ってしまおう、という“拡大手術”の時代がありました。もちろん、現在でも必要があるならば行う手技ではありますが、多くの方には“根治性を保ちつつ、残せるものは残す”よう努力をしています。そのためには日ごろからの手術の修練や最新技術の学習など、世界へ見聞を広げる努力を惜しみません。私も経験を重ねさらに技術が向上しているのを実感していますが、“加齢”には勝てずいわゆる老眼(遠視)が始まってきました。しかし、カメラ技術の進歩のおかげで鏡視下手術では肉眼よりも細かな、例えば0.1mmの細かな線維などもしっかりと見える“拡大視効果”があるため、精緻な手術がこれからも継続可能です。

ここで勘違いをしてはいけないことがあります。腹腔鏡手術は決して開腹手術より“良い治療”ということではありません。腹腔鏡手術はあくまで傷を小さくできて、おなかの中を開放して空気に触れさせないので“術後の経過がよい”という利点がある、ということですが、手術中に手の代わりに使用する“鉗子”は開閉と回転しかできません。つまり、手首と肘の関節が全く使えない状態での操作となるため、かなりの動作制限があります。もちろん指先の繊細な触覚もないため開腹手術よりも時間がかかってしまうことがあります。安全性を考慮した場合、開腹手術がベストな手術となる状況は現在でもあるということです。(とくに緊急手術では多くなります)

さて、がん治療における“手術”は究極の局所治療ですが、局所のみでは制御できない拡がりを持つ

た病期の方には“化学療法”を行っています。いま、がん化学療法も目まぐるしい進歩を遂げています。いわゆる“抗がん剤”だけであった時代から、分子標的治療薬やがん免疫療法を組み合わせた幅広い治療が可能となっています。胃カメラや大腸カメラなどで採取した組織を使って、がんに関連する異常タンパクや遺伝子などの発現を検査して、より適した薬剤を選択して治療を行っています。ただ、薬剤の組み合わせは思い付きで行うものではありません。すべてのがんに対して各学会などが“がん治療ガイドライン”を作製しています。世界中の治療の最新状況は“ガイドライン速報”として通達もあります。“ガイドライン”はどの分野においても“教科書”であり“最適解”ですので、当科でもガイドラインに沿った治療＝日本中と全く同じ治療、を行っています。

化学療法で使用する薬剤の投与量は、身長・体重・腎機能などから算出しますが、手術と同じくそれぞれの全身のさまざまな状態を考慮して治療にあたります。化学療法、とりわけ“抗がん剤”の副作用はみなさん非常に気にされるところですし、実際に治療の継続性にかかわります。化学療法は“〇回すれば大丈夫”という答えはありません。“継続は力なり”です。そのため適切な“加減”が必要です。全速力で走れる距離はたかがしれています。年齢を重ねればなおさらです。がん治療はいわば“駅伝”です。走って、休んで、(薬を)交代して、、、そして続けていくことが重要です。

私は2025年4月から当院に赴任しましたが、それ以前は長年にわたり鹿児島大学病院でがん治療を行ってきました。その経験と大学病院との人脈を最大限に種子島の診療に活用し、みなさまに最善の医療をお届けするよう、これからもさらに尽力して参りますので、宜しくお願い致します。



腹腔鏡手術の様子

循環器内科

循環器内科部長 藺田 剛嗣

循環器内科では虚血性心疾患(狭心症や心筋梗塞)、心臓弁膜症、心筋症、不整脈、末梢動脈疾患、大動脈疾患、肺循環疾患などの心臓および血管疾患、およびそれらの終末像としての心不全を診療しております。

2026年2月現在、田上寛容理事長を含め常勤4名で診療しております。2025年4月に、東祐大先生、小牟禮大地先生との交代で田方健人先生、窪田唯伊先生が着任しました。緊急の心臓カテーテル治療をいつでもできる体制を維持できております。

天陽会中央病院の北園和成先生には月3回の外来診療で毎回多数の患者さんを診ていただいています。鹿児島大学心臓血管・高血圧内科学教授の大石充先生、心臓血管外科学教授の曾我欣治先生、鹿児島医療センター不整脈治療科の塗木徳人先生にも月1回、外来診療をしていただいています。鹿児島市に行かずとも心臓血管内科・外科両方の教授や不整脈専門医の診療を受けられるのは大変貴重なことだと思います。

当院で対応困難な場合には鹿児島大学病院や天陽会中央病院、鹿児島医療センター、鹿児島市立病院などの鹿児島市内の病院とも連携を取る体制を整えております。

心臓カテーテル治療は2023年度が11件、2024年度は26件、2025年度は(2026年1月末まで)10か月で22件と、緊急体制を確立してから倍増しております。それでも鹿児島市内の施設と比べると圧倒的に少なく、たくさん手術を経験したい若手の医師からは物足りなく感じるかもしれません。

急性心筋梗塞の中でもST上昇型急性心筋梗塞(STEMI)は特に緊急性が高く、冠動脈血流をいかに早く再開させられるかが予後に直結します。病院到着から血流再開までの目標時間は90分未満です。日本の心筋梗塞における死亡率は欧米と比べても極めて低い水準にあります。それは緊急手術を受けられる施設が全国各地に分散している医療体制に支えられています。

私自身は2026年3月末で鹿児島市内の病院へ異動することとなりました。鹿児島市と陸続きのへき地と異なり、離島では夜間や悪天候の患者搬送が容易ではありません。緊急心臓カテーテル治療の「持続可能な」医師派遣を鹿児島大学の医局

へ訴え続けたいと思っております。日本心血管インターベンション治療学会のアンケート調査によると、1か月当たりのオンコール頻度は1週間に1回が38.1%と最も多く、次いで10日に1回が21.4%、3日に1回が14.5%、2日に1回は6.5%、毎日1.5%です。心臓カテーテル治療は医師2名が必要であり、当院では3名でオンコール体制を敷いておりますので各自3日に2回はオンコールです。前述の通り手術件数は少ないものの、全国と比べると待機という面では負担が大きいことが示唆されます。

田上寛容理事長は私よりはるかに多い外来・入院患者さんを診療しつつ、田上診療所での診療、はては在宅患者さんの訪問診療までされており、いつも尊敬の眼差しで見えておりました。また、患者さんやご家族に寄り添う姿勢も素晴らしく、その後ろ姿を見ては襟を正しておりました。クラーク、看護師や臨床工学技士をはじめ、全ての職種が優しい方ばかりで、非常に働きやすい環境だと感じました。他科の先生方には一方的に頼ってばかりで、業務負担の大きさの違いに後ろめたさを感じることもしばしばありました。

単身赴任でしたので、3週に一度、週末に自宅へ帰って妻や2人の息子と過ごすことを何よりの楽しみにしておりました。出不精、運動音痴、カナヅチですので、島内にいる週末は買い物以外ひたすら部屋にこもっておりました。釣りやゴルフ、マリンスポーツなど多趣味な方が羨ましいです。読書が唯一の趣味ですが、住民票を移していないため市立図書館で借りることができず、館内で長時間読みふけたのも良い思い出です。利用されるよそのお子さんにしたら、気味が悪いおじさんでしたでしょうが。

皆様に支えられて2年間、勤め上げることができました。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

消化器内科

消化器内科部長 福迫 哲史

当院は現在、私を含めて消化器内科2名が常勤しております。その他にも、鹿児島大学病院や鹿児島市立病院消化器内科より定期的に来てくださる非常勤医師とも協力し、島内での完結した医療を維持できるよう努めております。

また、吐血や下血などの消化管出血、閉塞性黄疸に対する緊急内視鏡検査にも対応できるよう体制をとっていますが、当院だけで対応が困難と判断される場合には、鹿児島大学病院や鹿児島市立病院をはじめとして鹿児島市内の病院とも連携を取り、遅滞のない医療を提供できるようにしています。

当院では年間として胃カメラ1,300~1,500件、大腸カメラ500~600件、内視鏡的逆行性胆管膵管造影(ERCP)による減黄術や結石除去術を年間50~70件、大腸ポリープへの内視鏡的粘膜切除術(EMR)を年間100件ほど施行しております。また左記に加えて魚骨やPTPシートの誤飲に対する異物除去なども行っています。

新型コロナウイルス感染症流行期には内視鏡検査の受診控えがありましたが、感染制御をはじめ各部署の尽力もあり、年間を通じての検査数は増加し、流行前と同等もしくは増加傾向となっております。

現在、当院は消化器病学会関連施設として認定されており、地域医療の中核として専門医として経験すべき症例は多数あり、内視鏡技術に関しても定期的に鹿児島大学病院での研修を行い、当院で行っていない検査に関しても日々研鑽を続けております。

消化器領域に関しては胃や大腸以外にも食道・十二指腸・小腸・胆嚢・胆管・肝臓・膵臓と多様な臓器にわたっており、外来受診の際の症状も胸やけ・症状から腹痛・下痢・吐き気・下血・黄疸・腹部膨満などさまざまなものがあります。胃カメラや大腸カメラなどを行ったことがない方は一度検査を受けてみることをお勧めします。

消化器疾患以外も同様のことが言えますが、病気の早期発見・早期治療は非常に重要なことであり、どんな些細なことでも構いませんので、お気軽に消化器内科にご相談ください。本誌が皆様のお手元に届く頃には、すでに私の任期は終了し、後任の先生が勤務されていることと存じます。

令和7年4月より勤務させていただき、1年間と短い期間でしたが、種子島における医療に携わることができたのは、病院スタッフの皆様の温かいお力添えのおかげであり、深く感謝申し上げます。

略儀ではございますが、誌面をお借りして厚く御礼申し上げます。皆様の今後のご健勝とご活躍をお祈りしております。本当にありがとうございました。

小児科

小児科医長 西 遼太郎

種子島医療センター小児科は、種子島全域の小児一次・二次診療拠点病院として、予防接種や健診などの予防医療、感染症を中心とした急性期疾患の外来診療や、一部入院診療、基礎疾患を有する児の定期診療などを行っています。また、種子島産婦人科医院と連携し、周産期医療にも携わっています。

専門外来：

- ・小児発達外来(岩元部長 毎週月曜日午前)
- ・小児循環器外来(2か月に1回)
- ・小児血液外来(岡本教授 2か月に1回)
- ・小児外科外来(家入教授 月1回)

周産期医療：

- ・種子島産婦人科医院と連携し、週2回の新生児健診ならびに1か月健診も実施

小児保健活動：

- ・予防接種(インフルエンザやHPVワクチンを除いて予約不要、月～土の午後)
- ・島内1市2町の保健センターにおける乳幼児健診

2025年4月に石坂医師が着任して、岩元部長、西、石坂医師の3名体制になりました。岩元部長は田上診療所院長も兼任されているため、種子島医療センターの一般外来は主に、西・石坂の2人体制で診療にあたっています。

2025年度を振り返ってみたとき、種子島においては夏前までは大きな流行はありませんでしたが、夏以降はマイコプラズマ感染症が多く、冬はRSウイルス感染症やインフルエンザA型・B型の流行がありました。インフルエンザの蔓延により学校閉鎖となる地域もありました。経過の中で入院加療を要する児もあり、その中で一部の2症例で鹿児島市内の病院に搬送となった症例がありました。ただそれ以外の児は、すべて当院で軽快退院させることができました。ひとえに小児医療に携わってくださった皆様のご協力のおかげ

と考えています。どうもありがとうございました。この場を借りて、御礼申し上げます。引き続き、当院で対応可能な症例に関しては、島内で治療を完結できるように診療にあたっていきたいと思っています。

2025年度から当科ならびに島内では、小児循環器を専門とする常勤医が不在となりましたので、鹿児島大学病院などから小児循環器の先生に来ていただき、2か月に1回の診療体制に変更となっています。今後も種子島の小児循環器診療を維持できるように尽力いたします。

私は、2023年10月に種子島へ着任して、初めての離島診療を経験し、早くも2年が過ぎました。予防接種や乳幼児健診といった一次医療の経験が新鮮であり、地域に密着した小児医療の中で多くの得難い経験を積むことができました。また、ついこの間まで、赤ちゃんと思っていた児が歩いて外来に來たり挨拶をしてくれたり、改めて子どもの成長のスピードについては目を見張るものがありました。

次世代を担う子どもたちが、健やかで安全に成長することができ、その御家族も安心して生活できる環境、社会インフラとしての小児医療を今後とも支えていきたいと思っています。そのためにも、皆様の御協力・お支えが不可欠です。今後ともよろしく願いいたします。

脳神経外科

脳神経外科部長 渡邊 章二

当院脳神経外科は、「脳神経の病気を迅速かつ的確に診断し、安全で質の高い治療を行う」ため日々の診療に取り組んでいます。脳の病気は突然発症することが多く、時に命に直結する重大な症状を引き起こします。また、一度発症してしまうと、その後の生活の質（QOL）に長く影響を及ぼすことも少なくありません。

なかでも脳卒中診療は、当科が最も重点を置いている分野のひとつです。脳動脈瘤破裂によるくも膜下出血、脳出血、脳梗塞などの脳卒中は、発症から治療開始までの時間が、その後の転帰を大きく左右します。当院では、24時間365日、救急搬入に対応できる体制を整え、CT・MRI・血管撮影装置などの高度な画像診断機器を用いた迅速診断を行っています。当院は日本脳卒中学会より「一次脳卒中センター」として認定されており、専門的な脳卒中治療を提供できる施設として認定されています。

治療方法も進歩しており、脳動脈瘤に対しては血管内治療によるコイル塞栓術や、開頭で動脈瘤を処理するクリッピング術など、患者さんの状態や動脈瘤の形状に合わせて最適な方法を選択しています。急性期脳梗塞に対しては、発症直後に有効なt-PA（血栓を溶かす薬剤）静注療法に加え、カテーテルを用いて血栓を取り除く血栓回収療法も行っています。これらの治療は、どれだけ早く治療介入できるかが予後に直結するため、救急部門や検査部門と緊密に連携し、一刻も早い治療開始を目指しています。

さらに、脳卒中は治療後のリハビリテーションが非常に重要です。当院では、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士といった専門職と協力し、早期からリハビリを開始できる体制を整えています。急性期から回復期まで切れ目のない支援を行い、後遺症を最小限にとどめ、患者さんが可能な限り元の生活に戻るようサポートしています。

脳卒中以外にも、髄膜腫などの良性脳腫瘍、突然の強い顔面痛を生じる三叉神経痛、頭部外傷、てんかん、片頭痛など、専門性が求められる幅広い病気に対し、個々の患者さんに最適な治療方針をご提案しています。より高度で集学的な治療が必要な場合には、鹿児島大学病院をはじめとした鹿児島市内の医療機関と常に連携が取れる体制を整えておりますので、ご安心ください。

2025年1月より大学病院から当院へ異動となり、約1年間勤務させていただきました。離島での診療は初めてで、島ならではの難しさを実感するところもありましたが、周りのスタッフにサポートしていただき、良い環境で診療を行うことができました。2026年4月からは鹿児島市内へ異動となりますが、この一年間の経験を活かして、より良い医療を提供できるよう、精進していきます。ありがとうございました。

糖尿病内科

糖尿病内科部長 山神 大

糖尿病内科は、糖尿病をはじめとした、甲状腺疾患や副腎疾患などの内分泌疾患を専門に診療しています。ホルモンの異常や代謝の乱れは全身にさまざまな影響を及ぼすため、正確な診断と継続的な管理が重要です。当科では、患者さん一人ひとりの病状や生活背景を大切にしながら、長期的な視点で治療とサポートを行っています。

糖尿病は、血糖値が慢性的に高くなる病気で、初期には自覚症状がほとんどないことも少なくありません。しかし、治療せずに放置すると、網膜症・腎症・神経障害といった三大合併症を引き起こし、視力低下や透析、しびれなど、生活の質（QOL）に大きな影響を及ぼす可能性があります。さらに、動脈硬化が進行することで心筋梗塞や脳梗塞などの重大な疾患につながることもあります。そのため、早期からの適切な血糖コントロールと、継続的な管理が何よりも大切です。

治療は、食事療法・運動療法を基本に、内服薬やインスリン療法、必要に応じてGLP-1受容体作動薬などを組み合わせ、患者さんそれぞれの年齢や生活スタイルに合わせて選択しています。また近年は、リアルタイムCGM（持続血糖測定）を積極的に活用しています。「リブレ」などの機器を用い、腕に装着した小型センサーで24時間血糖値を測定し、スマートフォンなどでリアルタイムに数値や変動、低血糖の兆候を確認できます。血糖の変動が“見える化”されることで、日常生活の中での食事や運動の影響が分かりやすくなり、より安全で効果的な治療へとつながります。

さらに、血糖値を整えるための入院治療や、食事・運動療法、自己注射や血糖測定の方法などを学ぶ教育入院にも対応しています。入院期間は患者さんの状況やご希望に応じて柔軟に調整し、退院後の生活にスムーズにつながられるように支援しています。

2025年度は医師3名体制でしたが、2026年度は2名体制となります。体制は変わりますが、引き続き質の高い診療を提供できるよう努めてまいります。外来診療は月・火・水・金に行っております。また火曜日の午後は田上診療所へ出向し糖尿病診療を行っています。

最後に、私事ではありますが、早いもので着任して1年が過ぎました。短い期間ではありましたが、本年度をもって異動することとなりました。他科の先生方や、多くのスタッフの皆さまに温かく支えていただき、日々楽しく診療にあたることができました。この場をお借りして心より感謝申し上げます。今後も当院糖尿病内科が地域の皆さまに信頼される診療科として歩み続けることを願っております。

麻酔科

麻酔科部長 多田 直綱

診療科紹介ということですが、当科は通常私の1人体制ですので、まずは自己紹介をさせていただきます。

私の生まれは四国、徳島県最南端の小さな町です。海・山・川に囲まれた自然豊かな地で釣りやサーフィンで有名なスポットもあり種子島とよく似ていると思います。そして高知大学で医学を学びました。キャンパスは畑と田んぼに囲まれたのどかな土地です。幼少期から大学生にかけて大自然に囲まれてのびのびと過ごした良い記憶があり、地域医療への関心はもともと高かったと思います。

大学卒業後は札幌で救急が盛んな病院で研修を積み、その後は徳之島で1年間、離島医療に従事することにしました。内科・外科・麻酔科など科の隔たりなくすべてを自身と限られた医療資源で解決しなければならない環境でさらに壁にぶつかり、レベルアップのために兵庫医科大学病院で麻酔科の研鑽を積みました。麻酔科専門医を取得した頃に縁あってこの種子島医療センターに従事することになりました。日本を転々としてきましたが、種子島の方々や気候風土に受け入れていただき、楽しく過ごして気づけば今年で移住4年目を迎えました。

さて、自己紹介は以上でここからは当科の紹介です。内科や外科と比べて世間一般には麻酔科医がどのように働いているかあまりイメージがないと思います。

麻酔科医とは「手術中の安全を守る専門医」です。麻酔科医の一番大切な役割は、手術を安全に、苦痛なく受けられるようにすることです。手術の前、手術中、手術の後にわたって麻酔科医は患者さんと関わります。

手術の前には、術前診察で体の状態をチェックします。持病はあるか、これまでに麻酔で困ったことはないか、飲んでいる薬はあるか、などを確認し、その人に合った麻酔の方法を考えます。困ったことや疑問があれば術前診察の時になんでも聞いてください。

手術中では、眠り・痛み・命を管理します。しっか

り眠れているか、痛みを感じていないか、手術中に不意に動いたりしないか、呼吸・血圧・脈拍・酸素・体温の状態(これらを合わせてバイタルといいます)を常にモニターで確認し、必要に応じて薬を調整します。バイタルを管理するのが麻酔科医の仕事です。また意識のないまま寝ていると手術をしている所以外で体を傷つけてしまうことがあります。例えば長時間の同じ姿勢による床ずれや関節の痛み、神経圧迫(腕を枕にして寝ると手が痺れることがありますよね。)などです。手術の間じゅう、患者さんの体の状態をずっと見守っています。

手術後には、麻酔から安全に目覚めさせ、痛みを和らげます。手術が終わったあとも、ちゃんと目が覚めているか、強い痛みや気分の悪さはないかを確認します。術後の痛みを減らすための痛み止めの調整も行います。

そして重要なことに、もしもの時に対応があります。手術中に急な変化が起きたとき、すぐに対応できるのが麻酔科医です。いわば、手術室の「安全管理責任者」です。

当院では島内で唯一手術が行える施設として消化器外科、整形外科、脳神経外科、眼科、泌尿器科などの定期手術を行っており、その手術で全身麻酔症例や局所麻酔で鎮静が必要な症例の麻酔を当科が担っています。

また緊急手術にも24時間365日対応しております。私が学会などで島内に不在の時は以前所属していた兵庫医科大学病院から応援医師の派遣を依頼して科の体制を維持していますが、基本的には1人での対応になります。種子島で暮らす方々が安全安心な手術麻酔をいつでも受けられるよう、私は自身の健康維持に努めています。いつ呼ばれても対応できるように島内では大好きなお酒を一滴も飲んでいません。手術は受けずに越したことはないですが、もし当院で手術を受けることになったら、どうか入院中だけでも(願わくは普段の生活から)禁煙など、ご自身の健康について真剣に考えていただければ幸いです。

救急科

病院長補佐／救急科科长兼放射線科部長 野田 健仁

2024年11月に当院で救急科が本格的にスタートしてから、約1年が経過しました。この1年間、地域の皆さまに安心していただける救急医療体制を整えるべく、スタッフ一同で試行錯誤を重ねながら取り組んでまいりました。昨年度に引き続き、野田(のた)が月曜・水曜・金曜の日中診療を継続して担当しています。そして夜間や休日の救急対応については、他診療科の先生方にも積極的に協力いただき、時間外に撮影する画像検査に関して24時間での緊急読影体制も整備し、院内全体で救急医療を支えています。また、日中は専門外来や田上診療所、馬毛島診療所とも密に連携し、患者さんを適切な場所で受け入れられるよう調整を行いながら、地域全体での医療提供体制を整備しています。

2025年度の救急搬送件数は1,216件となり、そのうち当院から自衛隊ヘリおよびドクターヘリによる広域搬送は39件にのぼりました。島内で対応が難しい重症患者さんを迅速に本土へ搬送するための重要な手段であり、関係機関との連携の強化がますます求められています。

今年度はDX(デジタル化)の取り組みとして、医療者同士がリアルタイムで情報を共有できるアプリ「Join」を活用し、2025年10月より多施設での運用を本格的に開始しました。馬毛島診療所や、ドクターヘリの基地病院である鹿児島市立病院とも直接つながることで、これまで電話やFAXに頼っていた連絡が大幅に減り、文字情報や画像による正確で迅速な共有が可能になりました。その結果、医療者が現場で患者さんと向き合う時間をより確保できるようになり、重症患者さんの相談や搬送判断にも大きく役立っています。特に緊急度の高いケースでは、アプリを通じた情報共有が迅速な搬送につながり、患者さんの予後改善にも寄与しています。今後は熊毛地区消防本部とも連携を予定しており、多数のけが人が発生する事故や災害時など、リアルタイムでの情報共有が不可欠な場面においても力を発揮できるよう、さらに連携を深めていく方針です。

また2026年2月には埼玉県自衛隊入間病院で開催された日本防衛衛生学会にて、「自衛隊基地工事がすすむ馬毛島における救急診療と課題」という内容で発表を行い、優秀演題賞を受賞いたしました。夜間の島外搬送は島民の命を守るという意味で必要不可欠です。発表を通じて、防衛省や自衛隊の皆さまに種子島の医療体制の現状や課題を理解していただくことは、今後の種子島全体、さらには熊毛地区の救急医療を維持・発展させていく上で欠かせない取り組みであると考えています。今後も継続的に情報発信を行ってきたいと思っています。

地域住民の方々に対し、2025年9月には熊毛地区医師会主催の救急医療県民講座において、「知らないと怖い救急医療～熱中症・アナフィラキシー～(びっくり！ヘビ咬傷も)」というテーマで講演を行いました。特にヘビ咬傷に関しては、参加者の方々が非常に詳しい知識を持っておられることに驚かされるとともに、地域に根付いた知恵を尊重しながら、医学的に正しい情報を丁寧にお伝えすることの大切さを改めて実感しました。

救急医療は、地域の暮らしを支える重要なインフラであり、決して途切れさせてはならないものです。昨今の人材不足が叫ばれる中でも様々な工夫を凝らしながら、これからも皆さまに安心していただける医療を提供できるよう、スタッフ一同努力を続けてまいります。引き続きご理解とご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

眼科

病院長補佐／眼科部長 田上 純真

一年を通して、大きなトラブルなく終えました。

手術件数は450件程度、例年通り白内障手術400例、硝子体手術30例、眼瞼下垂や翼状片などその他の手術20例、といったところです。

外来では、通常の診察を主として、抗VEGF薬の硝子体注射、ステロイド懸濁液のテノン囊下注射、霰粒腫や眼瞼腫瘍の切除などの外科治療、網膜光凝固術やYAGレーザー後囊切開術、レーザー虹彩切開術などのレーザー治療を行っています。

また、小児眼科としての斜視弱視外来を視能訓練士がコーディネートして、特殊外来として治療やトレーニングにあたっています。

白内障手術については、ここ10年で手術を希望される患者様のご年齢がかなり高くなってきていて、90歳以上で受けられる数も相当増えてきている印象です。これは、運転免許証を持っている高齢者の増加と比例していて、種子島のように自動車がないとお買い物や病院受診ができないという大きな問題を抱えています。島民の皆様にはいつまでもお元気でいていただきたいという思いと同時に、今の地方社会が抱えている課題にも向き合い、これからも診療をアップデートしていけるよう、常に工夫できないか考えています。

また種子島には糖尿病にかかっている患者様の数が多いと思われます。そうすると、まだまだアクティブな年齢でありながら、糖尿病性網膜症という難しい目の病気によって視力を奪われてしまうケースも多く見られます。

実際、気軽に手に入りやすい食べ物や飲み物には、糖尿病になりやすいものがたくさんあるのも問題です。私もたくさんの網膜症の患者様に出会い、治療を通してよりよい関係を築けるようにしてきましたが、なるべく早期に治療するためには、やはり何らかの社会的なサポートが必要なのではないかと思います。

診察をし、手術を行い、一緒に喜びを分かち合える眼科のいいところを活かして、これからも取り組んでまいりますので、よろしくお願いいたします。

看護部

【看護部理念】

安全、安心、安楽な質の高い看護を提供します。

【基本方針】

1. 私たちは、皆様の信頼に応えられる看護を実践します。
2. 私たちは、人権を尊重した心温かな看護を実践します。

【教育方針】

種子島医療センター看護部理念、方針、目標を達成するために
看護部一人ひとりが自分の目標を明確にし、
やりがいと達成感を味わうとともに
看護職として成長することを目指します。

看護部長室

看護部長 園田 満治



【令和7年度職員】（令和8年3月31日付）

看護部長／園田満治

副看護部長／竹之内 卓

副看護部長兼3階東病棟看護師長／平園和美

副看護部長兼感染管理認定看護師／下江理沙

【令和7年度 年間目標】

テーマ:変容・協働～状況の変化に柔軟に対応できるチーム力を培おう～

1. 病院経営に対応できる看護体制を確保する。
2. 一人ひとりが持つ力を発揮し、安心・安全な看護が提供できる組織作り
3. 満足度の高い職場環境作りを強化し、人材確保に努める。

【実績】

1. 病院経営に対応できる看護体制を確保する

- ① 病棟編成と看護師適正配置への取り組み。(70%)

入院患者の減少に応じて、病床数の削減に至る。そのため回復期リハビリ入院料3から1へ変更の取り組みを行い、入院料1を取得することができた。急性期病棟では依然、有期雇用により必要数が保たれている状態であり改善が必要。

- ② 効果的、安全な病床管理(50%)

病床数減少もあり病床稼働率を95%目標にしたが全体で87%と大幅に減少がみられた。特に急性期の外科病棟と回復期病棟の利用率低下があり来年度に向けて改善が必要。

- ③ 看護DX化として看護記録の見直し(80%)

年度初めより記録委員を中心にチームコンパス導入の準備を行い、12月導入後、定着しつつある。今年度は看護記録の標準化や記録時間の短縮を目標に改善を進めていく。

2. 一人ひとりが持つ力を発揮し、安全安心な看護が提供できる組織作り。

- ① 研修体制の充実による看護の質向上を図る。(50%)

看護部教育委員会を中心に、リソースナースを活用し毎月の勉強会を開催できた。eラーニングを利用した研修は、活用できていない現状があり来年度は取り組みや方法を変更する。

本年度、1名特定行為研修を修了。

- ② 専門チーム活動を通して、横断的な視点と看護実践能力を高める。(60%)

特定看護師、化学療法、緩和ケア、感染リンク、リスク等の各委員会が主体的に活動できた。身体拘束最小化チームの活動は改善が必要で、来年度より強化した取り組みを開始する。

3. 満足度の高い職場環境作りを強化し、人材確保につなげる。

- ① 事務部や他部署との連携を強化し、設備や働く環境を整備する。(60%)

病棟の内装を段階的に改装して、2病棟が終了。明るく清潔的な環境に変更出来てきている。来年度にナースコール・Wi-Fi環境整備に向けて取り組んでいる。

- ② 医師や多職種との役割分担を行いタスクシフトタスクシェアの推進を図る(50%)

医師事務作業室、看護助手室と連携し病棟・外来運営ができた。特定行為看護師の養成も進み医師との協働も進みつつある。

- ③ 看護職の多様な雇用形態を検討し、人材確保・職員満足度向上へ取り組む。(50%)

勤務体制の変更希望に耳を傾け、できるだけ希望に沿って対応し、入職できるように取り組んだ。

- ④ 業務の安全性・職員間の公平性・取得の優先度を考慮した年次休暇取得の整備

- ・年次休暇取得(90%)
- ・有給消化率 69%(前年比-6.86%)
- ・リフレッシュ休暇取得89%(前年比-3%)
- ・産休・育児休暇取得者4名(対象者100%)
女性3名 男性1名
- ・育児時短勤務利用者3名(希望者3名)
- ・介護休暇取得者 3名(希望者3名)
- ・時間外勤務平均 5.9H (前年比-0.6H)
- ・離職率 11%(前年比-1.9%)看護師のみ6%

年度途中で年間休日を105から120に増やしたこともあり、年次休暇やリフレッシュ休暇の取得率が低下した。来年度は計画的な取得に取り組みたい。

- ⑤ 広報活動及び学校訪問や就職説明会・病院見学の看護職員確保の試みを継続する。(80%)
- ・ふれあい看護体験(種子島高校10名・種子島中央高校3名・種子島中学校14名)
 - ・インターンシップ(種子島高校11名・種子島中央高校3名)
 - ・職業講話&島内企業ガイダンス(種子島高校)
 - ・職場体験(種子島中学校26名)
 - ・合同就職説明会 3回参加
 - ・県看護人材確保検討会(就職説明会)参加
 - ・看護系大学・専修学校訪問 4校
 - ・病院見学 5回開催 17名参加
 - ・WEB病院説明会 6回開催
 - ・人材確保事業(熊毛支庁総務企画課)
 - ・鹿児島市内学校訪問 1回
 - ・医療福祉キャンプ交流事業参加

【振り返り】

本年度を振り返り、看護部の取り組みで2つの大きな対応があった。

1つ目は、看護記録のシステム「チームコンパス」の導入である。記録委員を中心に準備を進め、12月から本格的に使用を開始し、3月までに何とか定着してきた。今後は、看護記録の標準化と記録時間の短縮を進めていきたい。

2つ目は、看護学校サテライト校開校に向けての準備協力である。令和4年から原田学園、西之表市、種子島医療センターで協議を開始し、検討会を繰り返し、官民一体となり、離島では初となる完全リモート授業形態の「原田学園鹿児島医療技術専門学校 種子島サテライト教室」の準備が整い、R8年3月に開校式が行われ、4月より授業開始となった。看護部も、協議会への参加や教材の準備、人材紹介などに協力してきました。種子島で看護師が養成できることは、看護師不足の現状を解決する大きな対策となると考えている。今後は初めて看護学校の実習を受け入れていくこととなるが、学生を受け入れる準備を進め、種子島で学んだ看護師が、住み慣れた島に住み続けるための安定した医療と安心の提供が行えるよう、共育を進めていきたいと考えている。

外来

主任 美坂 さとみ



【令和7年度職員】（令和8年3月31日付）

副師長/荒木 敦

主任/美坂さとみ 主任/松本一美

看護師/赤木秀晃、白尾雪子、山下ひとみ、山口一江、日高靖浩、中野美千代、長濱美香、前田稀恵、西田多美子、大谷清美、川口文代、永田理恵、春村美智枝、北蘭ゆかり、鮫島理枝子、高橋 望、川脇靖迪、永瀨みや子、永瀨たか子、横林律子

眼科視能士/迫田久美

ナースエイド/遠藤みゆき、永井珠美、丸野真菜美

【令和7年度 年間目標と振り返り】

1. 十分な説明と丁寧な対応・心配りを大切にし、多職種と連携し、安全で安心な外来診療を提供する。

- ・患者・家族対応時は、声掛け、態度に配慮し、安心感を与える接遇を意識する。
- ・医師、クラーク、ナースエイド、医事課、診療支援部・病棟等と情報共有をこまめに行い、診療の流れを円滑にする。
- ・院内勉強会の参加(医療安全・感染対策 2回以上/年)し、専門的知識の研鑽に努める。
- ・患者確認や薬剤確認、処置のダブルチェック、指差し呼称の徹底を確実に行う。

2. 経営意識を持った、効率的な看護実践を推進する。

- ・業務改善のためのカンファレンスを月に1回以上行い、業務効率化の提案を行う。
- ・物品の使用状況を把握し、無駄のない適正在庫を検討する。
- ・医師の指示に基づき、行った診療・看護行為についてオーダー入力が確実にされているか確認する。

3. 一人ひとりの人生設計に寄り添える勤務体制を構築する。

- ① 業務や組織体制の見直しを行い、ワーク・ライフ・バランスの充実に努める。
 - ・毎月、定期的にスタッフ会議を行い、より良い働き方について意見を出し合う。
 - ・事情に応じて柔軟な働き方の選択ができ、就業可能な体制を検討する。
- ② 働きやすい職場風土を目指す。
 - ・リフレッシュ休暇、計画的な年次休暇の取得(前年度取得以上を目標)。
 - ・協力し合う職場風土作りに努め、時間外勤務の減少に取り組む。

【実績】

- ・外来カンファレンス内での勉強会の実施(講師:救急科 野田健仁科長)。
- ・院内勉強会(医療安全、感染対策)年間2回以上参加。
- ・全スタッフリフレッシュ休暇取得。
- ・スタッフ会議の開催(毎月)。
- ・看護助手業務タイムスケジュール改定。
- ・業務改善の取り組み16項目実施。

【業務について】

今年度は、外来業務の見直しを徹底的に行い、16項目において業務フローの改善やICTの活用により、安全かつ効率的な業務運用を実現しました。

患者・家族支援においては、個々の生活を支えるため、多職種連携を強化し、質の高い看護の提供に努めました。院内勉強会への参加を通じて自己研鑽に努めるとともに、各診療科の勉強会では専門的知識の習得に努めました。

また、勤務体制については、ワーク・ライフ・バランスを意識した取り組みを進め、スタッフ一人ひとりの人生設計に寄り添った柔軟なシフト調整や職場環境の整備を行うことができました。今後もさらなる質の向上を目指し、全スタッフで協力していきたいと思っています。

手術室・中央材料室

副看護師長 小川 智浩



【令和7年度職員】（令和8年3月31日付）
副看護師長／上妻ゆかり・小川智浩 主任／田上義生 看護師／田上俊輔 松下夏樹
眼科専任看護師／川口文代 ME主任／西 伸大
ME／上妻優美
ナースエイド／濱本加奈、岩元夏奈江、水口明日香
事務／新藤美津子

【令和7年度 年間目標】

1. 一人ひとりが自己力を発揮し、安心・安全な看護提供を図る

- ① 個々の力、特性を十分に発揮できるようサポートしていく。
- ② 患者・スタッフが安心して手術を行えるよう備品等の見直しを行う。
- ③ 自己研鑽を図るため、積極的に研修に参加する。

2. 病院経営に興味を持ち参画する

- ① 備品の取り扱い時は十分に注意し破損しないよう努める。
- ② 個々がコスト意識を持ち取り組む。

3. 働きやすい職場環境作りに努める

- ① 定期的なカンファレンスを実施し、意見交換を行う。
- ② 他部署、他職種との連携を図り、負担軽減に努める。
- ③ 公平的に年次有給休暇を取得し、リフレッシュを図る。

【実績】

- ・年間手術件数：932件
- ・心臓カテーテル検査：21件
- ・脳血管撮影検査：22件
- ・全身麻酔手術：335件
- ・マニュアル見直し・改定、書類整理の実施。
- ・手術機器・麻酔機器のメンテナンスの実施。
- ・手術キット内の使用しなかったディスプレイ製品（覆布やカップなど）病棟へ配布し有効活用した。
- ・予定手術に対する各科医師・麻酔科医・手術室スタッフのカンファレンスを毎週実施している。

【振り返り】

限られたスタッフで、予定手術や緊急手術に対応し、慌ただしく時が過ぎました。お互いに協力し声を掛け合うことで、事故なく安全に手術・検査を実施することができました。

また、マニュアルの見直しや備品の整備、機器点検を行い、患者・スタッフ双方の安全確保を図ることができたと思います。

年間1,000件近い手術・検査が実施される中、各スタッフがプロ意識を持って対応していますが、精神的負担の軽減を図るため、休暇取得の際は「お互い様」の精神で残りのスタッフが協力しながら対応しています。リフレッシュを図りつつ、日々の手術にあたっています。

2階病棟(外科・脳神経外科・整形外科病棟)

看護師長 矢野 順子



【令和7年度職員】(令和8年3月31日付)

看護師長／矢野順子 副看護師長／山之内信、坂下紀子 副主任／能野明美、羽生秀之 看護師／北村綾乃、山田こず恵、西田ひずり、蔵元陽子、平原景子、町田愛音、古賀奈々、宇津山真子、平野愛華、松山萌夏、瀬戸口依里、増井幸菜、中村莉乃、折口蓮、藥丸聡摩 メッセンジャー／沖吉絵里子 ナースエイド／池濱悦子、横山夢乃、倉橋香、矢野渚、坂下加奈

【令和7年度 年間目標】

状況の変化に柔軟に対応できる人材育成

1. 意識的な病床管理を念頭にコスト意識をもって病院経営に参加する

- ① コスト意識をもって、機器や備品、SPDカードの取り扱いに注意する。
- ② 加算漏れが起きないように確実な加算の取得、確認の徹底。
- ③ 病床管理を意識し、効果的なベッド稼働を行う。

2. 個々の持つ力を最大限に発揮し、安心・安全な看護を提供する

- ① 各委員会活動に自主的に参加し、病棟内での情報共有を図る。
- ② 専門的知識を部署内勉強会等で伝達し自己向上を図る。
- ③ インシデント0レベルレポートを積極的に報告し、医療事故防止に努める。
- ④ 感染対策の徹底。
- ⑤ 院内勉強会・研修会・院外研修会等に積極的に参加し自己研鑽に努める。

3. 働きやすい職場環境作りを目指し、業務改善を行うことで人材確保へつなげる

- ① 計画的な年次有給休暇、リフレッシュ休暇の取得(5連休計画)。
- ② 効果的に業務を遂行し、時間外勤務の減少へ取り組む。
- ③ スタッフ同士が協力し合える環境作りを行い、離職率減少を目指す。

【実績】

- ・毎月持ち回り制で病棟会を実施し、「意見交換と学の間」として定着させ、各スタッフが委員会等でいた知見を共有する場として活かすことができた。
- ・チームごとに定期的に患者カンファレンスを実施し、他者の視点を取り入れることでより安全で質の高いケアにつなげることができた。
- ・少ないスタッフで多忙業務を乗り切るため、全員が年間を通して5連休以上の休暇の取得を実践することができた(年次休暇、リフレッシュ休暇の有効な取得)。

【振り返り】

急性期外科系病棟の特性でもある連日の入院に加え、緊急・予定手術や化学療法など、多忙な業務をこなすため全員が協力し合える環境づくりを心掛けましたが、まだまだと感じる1年でした。

しかし、多忙な中でも限られた人員の中で支え合い、5連休以上の休暇を全員が取得できたのは大きな成果でした。来年度はコスト意識の向上や多職種連携をさらに深め、患者様に安心・安全な看護を提供できるよう、スタッフ全員で支え合い一丸となって精進してまいります。

3階西病棟(内科・眼科・小児科病棟)

看護師長 平山 靖子



【令和7年度職員】(令和8年3月31日付)

看護師長／平山靖子 副看護師長／田中加奈、鮫島昇樹 主任／谷英佳 副主任／大中沙織
看護師／吉永美由希、山田愛理、内甌愛海、小川かおり、宗石留美子、西山珠奈、藤本瑞希、安本 響
ナースエイド／鎌田瑞樹、岩永芙美子、羽生龍斗、原崎清美、今平謙一

【令和7年度 年間目標】

1. 安定した病床管理を実践し、コスト意識を持ち経営に参画する。

- ① 診療報酬に基づいた適正な加算を算定し、加算漏れが起きないようにする。
- ② SPDカードや備品の破損、紛失をしない。
- ③ 病床管理を意識し、ベッド稼働率(90%以上)を維持する。

2. 個々の持つ力を最大限に発揮し、安全・安心な看護を提供する

- ① 委員会活動に参加し部署内で情報共有する。
- ② 3ヵ月以上のアクシデントを起こさない。
- ③ 感染対策を徹底する・手指消毒液使用1本以上/月。
- ④ 接遇の向上を図る・苦情、クレーム0を目指す。
- ⑤ 自己研鑽のために院内・院外の勉強会や研修会に積極的に参加し知識や、技術を向上させる。
- ⑥ 患者のベッドサイドにいる時間を増やし、ケアの充実を図る。

3. 働きやすく満足度の高い職場環境をつくる

- ① 計画的な、年次有給休暇、リフレッシュ休暇の消化。
- ② 効率的な業務を行い、超過勤務減少に繋げる。
- ③ 相談しやすい環境づくりを行い、離職率減少に繋げる。
 - ・新人看護師、派遣看護師との定期的なミーティング。
 - ・派遣看護師、異動看護師のフォローアップ。
- ④ 皆で協力して業務が行えるようスタッフ間の情報伝達や連携を強化。
- ⑤ 業務マニュアルの整備。
- ⑥ 病棟の整理整頓・備品を常時必要数揃える。

【業務について】

当病棟は内科・眼科・小児科の混合病棟です。幅広い年齢層の患者様の看護を行える場所です。忙しく、業務に追われるときもありますが、スタッフ間は相談しやすい環境で、協力体制に優れており、派遣看護師も派遣期間を延長してくれます。指差し呼称の定着にも力を入れており、朝の朝礼後にスタッフ全員で指差し呼称を行っています。

当病棟に興味のある看護師の方、一緒に働いてみませんか。種子島での生活をしましょう。連絡をお待ちしています。

3階東病棟(地域包括ケア病棟)

看護師長 平園 和美



【令和7年度職員】(令和8年3月31日付)

看護師長／平園和美

副看護師長／丸野嘉行・瀬古まゆみ

主任／山之内英子・榎本親子 副主任／迫田かおり

看護師／飯田ゆりえ、長瀬まゆみ、荒河貴子、鷲尾

志保、小倉美波、向井蘭、河野瑞穂、奥村洋子

中山由加里、木藤洋子、橋口みゆき

ナースエイド／三瀬祐子、磯川ひとみ、河野鈴子

鮫島和奏、永濱利恵、小脇尚代、榎元尚子

YIN MIN THANT, THIN LAE THWE

【令和7年度 年間目標と実績】

1. 地域包括ケアシステムを念頭に置いた看護の実践。達成率:80%

①退院後を見据えた計画的な療養生活を提供
する。

②慢性期患者様の緊急入院に対応する。

転入・入院後 1週間～10日以内に多職種カンファレンスを実施し、さらに 週1回の回診カンファレンスで継続的に情報共有を行った。これらの場を通じて、本人および家族の意向を踏まえた目標設定を行い、支援方針の統一を図った。

目標設定が難しいケースについては、ケアマネジャー、地域包括支援センターが介入し、地域資源を活用した支援体制を構築した。また、積極的な転入受け入れと、在宅療養者や施設からの緊急入院の受け入れ20%以上を目標に地域の医療ニーズに対応した。その結果、年間を通じて病床稼働率90%以上を維持し、急性期病棟施設の受け皿として積極的に対応している。

2. 安全・安心・安楽な看護の提供。達成率:80%

①患者様、ご家族の意向に寄り添い、身体的・精神的苦痛に対するケアを提供する。

②医療安全に対する意識を高く持ち安全活動に参加する。

安全・安心・安楽な看護を基盤に、患者と家族の思いに寄り添う看護を実践してきた。面会時に患者様の様子を説明。また、家族の思いを確認し家族の不安軽減に努めた。一方、島外に家族がいる患者への寄り添った看護が十分出来なかったケースもあった。医療安全に関しては、医療安全研修会に参加できていないスタッフもいた。

また、インシデント報告件数が少なく指差し呼称が徹底されていなかった。手指消毒の使用量が少ない状況がみられ、感染予防に対する意識が十分に浸透していなかった。医療安全に対するスタッフの意識向上、医療安全文化が定着できるような取り組みが必要である。

3. 明るく風通しの良い職場環境づくり。達成率:90%

①多職種とのコミュニケーションを大切に
する

②ワーク・ライフ・バランスを取りやすい職場
にする

患者カンファレンスや多職種への相談等を通じて多職種と積極的な意見交換を行うことでよいコミュニケーションを構築できた。

スタッフが安心して働き続けられる環境を整えるため、リフレッシュ休暇の取得や年次有給休暇の計画的な消化に取り組んだ。また、昨年より年間休暇の増加によりスタッフの心身のリフレッシュとワーク・ライフ・バランスの向上に繋がった。

【まとめ】

当病棟では、医師の許可があれば速やかに転棟が可能な体制を整え、在宅、施設からの積極的な患者受け入れを継続して行った。急性期後の受け皿としての役割を果たしつつ、患者の生活背景に寄り添った支援を提供している。

今年度は安定した病床運用を維持し、次年度は病床稼働率100%を目指すことを目標とする。地域の医療ニーズに確実に応えるため、受け入れ体制のさらなる強化を図る。また、患者・家族が安心して療養できるよう、医療安全の構築と質向上に取り組むとともに、スタッフが前向きに働けるよう、働きやすい職場づくりを推進する。多職種連携の強化や業務の効率化を通じて、チーム全体の力を高めていきたい。

4階病棟(回復期リハビリテーション病棟)

看護師長 西川 友美子



【令和7年度職員】(令和8年3月31日付)
 看護師長／西川友美子 副看護師長／羽嶋民子
 主任／能野信枝 副主任／福山光知子
 石井智子、中山君代、武田まゆみ、大町田知里、
 上妻幸枝、川畑瑞帆、酒井琴名、上妻てるみ、
 岸美記子、赤木みどり、尾野さとみ、渡辺弘美、
 吉山文子
 ナースエイド／日高美代子、大山晴美、大田英子、
 松山功弥、大河清美、MYINT NILAR AYE、
 NAY CHI、上妻さゆみ、岩屋かおる

【令和7年度 年間目標と振り返り】

社会生活への復帰を見据えた、安全・安心で
 質の高い療養環境を提供し、患者・家族に寄り
 添った看護の実践を行う。

1. 退院後の生活を見据えた看護の充実(達成率75%)

患者・家族の希望に沿ったケアは概ね実施できていた。コロナ禍で休止していた、『日中普段着で更衣を朝夕実施』や『朝のラジオ体操』も再開することができた。一方、看護師とセラピスト間の意見調整が不十分な場面があり、退院調整に影響を及ぼすことがあった。情報共有の強化を目的にカンファレンスを確実に実施し、連絡ノート・介助表・病棟スケジュール表の活用漏れがないよう徹底する。

また、患者のリハビリ目標達成に向けて、多職種が共通の目標を持ち、連携して取り組む意識を高めていく必要がある。

2. 安全で質の高い医療・看護ケアの提供(達成率70%)

認知症の転倒・転落ハイリスク患者が多く、ストレスや不安、精神的負担が大きい中で業務を行っていた中、インシデントレポートは96件(うち転倒が39件で約4割)であり、アクシデント3b(骨折)は1件と昨年とほぼ同数であった。また、アクシデント発生時に報告漏れがあったため、フローを修正し改善を図った。

感染防止対策については、病棟に感染症患者がいる場合は手指消毒の使用量が増加したが、不在時は他病棟と比較して使用量が少なかった。今後は、手指消毒5つのタイミングが自然に実践できるようスタッフへの意識づけを強化する必要がある。

3. 安心して働ける職場環境の確立(達成率90%)

旅行や家族行事、体調不良、家族介護などに配慮し、休暇を取得しやすい環境づくりができた。あわせて、個々の状況に応じたシフト調整を行い、働きやすさの向上に寄与した。

業務面ではチームコンパスが導入され、新たな看護記録様式への移行が求められたことで、不安を感じる場面もあった。しかし、スタッフ間で疑問点を共有しながら対応することで、徐々に業務の定着が図られた。

今後は、チームワークのさらなる強化を図りつつ、新システムの円滑な運用と定着を推進していく必要がある。

【業務について】

全国的に人員不足が問題となっており、代替案や対策が求められている中、自病棟においても、人員配置は基準上は満たしているものの、現場では不足感がある。その中で、休日を調整して院内バイトとして食事介助や入浴介助に入るなど、人員不足を補い、現場全体で助け合う姿勢が構築されている。チームワークが良く、非常に助けられており、病棟として誇らしく感じている。

一方で、このような現状を踏まえ、上層部には課題として共有し、改善に向けた取り組みが必要である。人員確保が困難な場合には、それを補完する設備投資(例:スマートフォンでナースコール対応状況を把握できるシステムの導入)など、早急に検討してもらいたい。

透析室

副看護師長 江口 貴子



【令和7年度職員】（令和8年3月31日付）
副看護師長／江口貴子 主任／長野香奈
看護師／門脇輝尚、中原美智子、犀川久子、中脇妙子、日高貴久美、松元まり子、石上香寿子、崎山弘美、高松佳史
看護助手／鮫島秀子、本炭ひとみ

【令和7年度 年間目標と振り返り】

1. 限られた医療資源の中で、透析室における効率的な看護を提供する。

- ① 看護業務の可視化と業務分担の見直しにより、無駄のない効率的な看護提供体制を確立する。
- ② 適正な看護配置とケアの標準化を進める。
- ③ インシデント低減に向けた安全管理対策を強化する。

⇒ 透析患者数の変動や人員配置の制約がある中で、業務の優先順位付けや役割分担の見直しを行い、効率的な看護提供に努めた。一方で、繁忙時には業務負担の偏りが見られる場面もあり、今後はさらなる業務改善と人材育成が課題である。

2. 安心・安全に透析治療が受けられるよう、質の高い看護の提供体制を整備する。

- ① 透析業務に精通した看護師の計画的な配置。
- ② 緊急時対応能力の強化。
- ③ 定期的な勉強会、シミュレーショントレーニングの実施。

⇒ インシデントの共有やカンファレンスを通してリスク意識の向上を図り、安全対策の強化に取り組んだ。また、感染対策や透析中の観察強化、異常の早期発見に努めることで重大事故の防止に努めた。

3. 一人ひとりが働きやすさとやりがいを感じられる職場環境を構築する。

- ① ワークライフバランスに配慮した勤務体制の見直し。
- ② 定期的なスタッフミーティングの実施。
- ③ ストレスチェックの活用とフォロー体制の整備。

⇒ スタッフ間のコミュニケーションを大切にし、風通しの良い職場づくりに努めた。一方で、経験年数による負担差や心理的負担への配慮が課題として残っており、今後も継続した取り組みが必要である。

【透析実績延べ人数】

2025.4	780人	臨時1名、ゲスト1名
2025.5	788人	新規導入1名、ゲスト1名
2025.6	756人	臨時5名、ゲスト1名
2025.7	824人	新規導入1名、臨時2名 ゲスト1名
2025.8	794人	臨時4名、ゲスト2名
2025.9	752人	臨時4名、ゲスト2名
2025.10	764人	新規導入1名、臨時2名、 ゲスト2名
2025.11	678人	新規導入1名、臨時1名
2025.12	750人	臨時2名、ゲスト1名
2026.1	735人	新規導入1名、臨時4名
2026.2	656人	新規導入1名、臨時1名
2026.3	754人	新規導入1名、臨時5名 ゲスト1名

【業務について】

透析室では、血液透析を安全に実施するため、透析前の状態観察・準備、透析中の継続的な観察と異常時対応、透析後の止血確認と状態管理を行っています。また、多職種との連携を通してチーム医療が充実しており、安心・安全な透析治療の提供につながっていると考えます。

透析室は、患者様と長期にわたり関わる中で信頼関係を育み、その人らしい生活に寄り添った看護を実践できる場であると思っています。

また、スタッフ同士が声を掛け合い支え合う風土があり、温かい雰囲気の中でチーム医療を実践しながら成長できる職場であると言えます。

外来化学療法室

室長／がん化学療法看護認定看護師 山之内 信

【令和7年度職員】（令和8年3月31日付）

責任者／山之内 信

看護師／美坂 さとみ、松本 一美、高橋 望

【令和7年度 外来化学療法室振り返り】

1. 島民に寄り添う継続看護の実践

本年度は、外来通院治療を受ける患者様が住み慣れた島で安心して療養を継続できるよう、継続的かつ個別性のある今後の提供に努めた。

外来受診時だけでなく、治療後の電話訪問を積極的に実施し、有害事象の早期把握と不安軽減を図った。離島という地理的特性上、体調変化時の受診判断に迷うケースも多く、症状の具体的確認と受診目安の再説明を行うことで、重症化予防につなげた。

また、単なる副作用対策に留まらず、生活背景や家族状況を踏まえた支援を行い、「治療を受けながら生活する」ことを支える関わりを大切にしました。

2. 外来と入院をつなぐ切れ目のない支援体制

外来と病棟間の情報共有を強化し、治療経過や有害事象歴をリアルタイムで共有できる体制を整備した。入院加療が必要となった場合でも、外来での経過を踏まえた継続看護が実践できるよう努めた。

診療前カンファレンスでは、医師・薬剤師・看護師で患者ごとのリスクや社会的背景を共有し、予測的介入を行った。離島医療では「事前準備」が安全性を左右するため、支持療法の強化や患者・家族への説明の統一化を行った。

3. 安全性の確保と専門性の向上

抗がん剤投与における確認手順の順守を徹底し、インシデント事例は速やかに共有・分析を行った。特に免疫療法に伴う有害事象については、初期段階での対応を重視し、観察項目の明確化を行った。

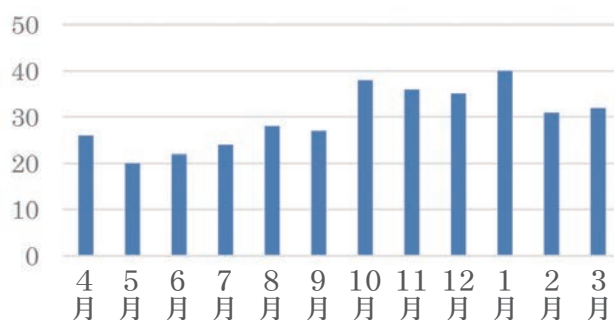
また、新規レジメン導入時にはスタッフ間で学習機会を設け、離島であっても標準治療を安全に提供できる体制維持に努めた。

4. 地域に根差した外来化学療法室として

外来化学療法患者数は増加傾向にあり、治療内容も高度化している。その中で私たちは、「通う場所」ではなく、「支え続ける存在」であることを意識してきた。

電話訪問や相談対応を通じて、患者様から「ここに相談すれば安心」と言ってもらえる場面も増えている。離島という地理的制約がある中でも、安心して治療を継続できる体制づくりを強化していきたい。

外来化学療法患者数（件）



合計 359件

【最後に】

外来化学療法は年々高度化・複雑化している。しかし、離島であっても治療の質に差があってはならない。私たちは限られた医療資源の中で知恵を出し合い、多職種で支え合いながら、島民の皆様の「ここで治療を続けたい」という思いに応えてきた。

これからも専門性を磨き続け、予測的判断と継続的支援を強化し、この島で安心してがん治療を受けられる環境を守り続けていきたい。

ナースエイド(看護助手)室

室長 横山 夢乃



【令和7年度職員】(令和8年3月31日付)

室長／横山夢乃

2 F／池濱悦子、倉橋香、横山夢乃、矢野渚
坂下加奈

3 西／原崎清美、岩永芙美子、鎌田瑞樹
羽生龍斗、今平謙一

3 東／三瀬祐子、磯川ひとみ、鮫島和奏、河野鈴子
永濱利恵、小脇尚代、榎元尚子
YIN.MIN.THANT、THIN.LAE.THWE

4 F／日高美代子、大山晴美、大田英子、松山巧弥
大河晴美、上妻さゆみ、岩屋かおる
MYINT.NILAR.AYE、NAY.CHI

外来／丸野真菜美、遠藤みゆき、永井珠美

透析／鮫島秀子、本炭ひとみ

【令和7年度 年間目標】

1. 外国人労働者達に対する職場環境の改善及び勤務教育の実施。
2. 各部署の業務問題点を把握し改善に努める。
3. 入院患者様一人ひとりに寄り添った安心安全な介護を務める。

【業務内容】

私たちの業務は主に入院患者様への食事配膳、下膳、自身での行動が難しい患者様の食事介助、入浴介助、排泄介助など、患者様の入院生活を介助、サポートする事。病棟のゴミ出しや退院時の清掃など、病院内の環境整備も行っている。

また、看護師と共に検査時の移動や機材の受け渡し、その他患者様のお部屋を移動する際など看護師業務がスムーズに出来るようサポートも行っている。

【実績】

教育人員上の理由からミャンマーからの外国人労働者たちは4階病棟と3階東病棟に配属され、混乱を避けるために一人ひとり専属の職員が付き業務と語学を教育する事となった。

外国人労働者達に対し業務マニュアルにフリガナを付けたり、可能な限りゆっくりと標準語で話すなどの配慮や、患者様の言葉が聞き取れない場合などは通訳をするなど職員同士でのコミュニケーションも多く見られた。

また、来日前に日常会話が出来る程度に日本語学習を行っているため、勤務も問題なく行えている。

【振り返り】

近年慢性的な人員不足により精神的にも肉体的にも大変な部分が多く見られていましたが、昨年度から来日した外国人労働者たちの活躍により各個人にかかる勤務時間や業務の負担が分散されたとの声が上がっています。

昨年度は試験的な意味もあり4階病棟、3階東病棟に限定して配属されましたが、今年度から他の病棟にも配属される事が決定しました。

異なる文化を持つ職員が今後増えていきますが、互いに尊重することを忘れずに、より真意に業務に取り組み改善を継続して行きたいと思っています。

診療支援部

診療支援部

薬剤室

副室長 谷 純一



【令和7年度職員】（令和8年3月31日付）
 薬剤師室長／濱口 匠 薬剤師副室長／谷 純一
 薬剤師／桃野彰子 菅嶋優子
 調剤助手／日高清美、横山ゆきえ、深田麻美

【令和7年度 年間目標】

1. チーム医療への貢献・人材育成への注力
2. 適切な薬剤の供給・使用体制確保
3. よりスマートな薬剤関連業務への見直し

【実績】

人材育成・地域医療の質向上を目指した講演会

- 4月…新人看護師教育（麻薬製剤の取り扱い）
 6月…感染対策向上加算1法令研修（当院の使用状況から考えるメロペネムの適正使用）
 11月…第1回熊毛地区がん薬物療法連携セミナー（主ながん化学療法レジメンの紹介とトレーニングレポートの活用について）
 2月…地元企業説明会（種子島高校にて講演）

薬剤供給状況・流通状況に応じた柔軟な対応

令和7年度も薬剤供給が不安定な状況が続いていた。医薬品メーカーや卸会社からの流通状況の確認を常日頃から行うことで、代替薬の選定などで困窮することがないように注力している。

人員不足への取り組み

人員不足を補う業務機械化への取り組みとして5月に医薬品自動仕分け装置（TAB-SORT）を導入

中止・返品薬剤を安全かつ効率よく仕分けし再利用することが可能となった。

【振り返り】

病院規模にあった人材確保が難しい状況が続いており、薬剤管理指導件数が低迷した月もあった。マンパワー不足はもちろんあるが、近年は一人ひとりの薬剤師の指導能力の分析を行い、毎月フィードバックを行うことで、より効率的で質の高い指導業務が展開できるよう業務改善を行っている。

人材育成の面では、後世の薬剤師を育成できる環境作りを目指し、日本病院薬剤師会の認定薬剤師の資格取得及び、実務実習指導薬剤師の資格取得に向けた自己学習に取り組んでおり、R7年度は1名の薬剤師が研修認定薬剤師となった。今後も院内教育や島内医療機関や調剤薬局との連携を積極的に行い、離島であっても常に新しい知識や技術取得が可能な種子島医療センター薬剤室として魅力を発信していく予定である。



医薬品自動仕分け装置

画像診断室

室長 川畑 幹成



【令和7年度職員】（令和8年3月31日付）

室長／川畑幹成

診療放射線技師／田上直生、上浦大生、日高みなみ、
上山裕也、白尾颯司、中村詩乃、園田佳大

助手／中河さつき

【令和7年度 年間目標と実績】

1. 一般撮影、撮影技術及び検像の向上と統一化
対象者5名(4年目以上)の中、3名達成とする。

〈担当:川畑/上山〉

2. JapanDRLs2020公開による検証と見直し

- ① 袖駆血による造影不良啓蒙ポスターの作成
〈担当:上山〉
- ② CT検査 TKA_撮影画像作成マニュアルの作成
〈担当:川畑〉
- ③ CT検査 THA_撮影画像作成マニュアルの作成
〈担当:川畑〉
- ④ 病院用_リスクマネジメントマニュアルの見直し
〈担当:川畑〉
- ⑤ 画像診断運用規定の見直し
〈担当:川畑〉
- ⑥ 血管造影検査マニュアルの見直し
〈担当:田上〉

3. 装置更新を踏まえた撮影プロトコル・パラメータ、付随マニュアル、線量等の整理及び管理

- ① Quick Lancer 使用方法マニュアルの作成
〈担当:田上〉
- ② 家族性高コレステロール血症におけるアキレス腱マニュアル
〈担当:中村〉
- ③ ガラスバッチ装着前検査マニュアル
〈担当:上浦〉

（CT検査）

※来年度更新がスムーズにできるよう、まずは現在ある撮影プロトコルを整理中。現状では画質及び線量評価ができていない。

〈担当:川畑〉

（血管造影検査）

※検査マニュアルの作成を行い、改定作業中

※装置更新に備えての撮影プロトコルの整理中

〈担当:田上/上浦〉

4. 読影の補助の実態把握と強化

医師に対して、読影の補助をした技師は台帳に記載し管理を行うこととしたが、勉強会等で振り返りを行う必要がある。

〈担当:日高/川畑〉

【実績】

- ・夜間休日対応技師:3名から4名へ
- ・遠隔読影システムの変更

【振り返り】

昨年、主力技師の退職により業務負担が大きくなったが、新人技師2名の成長により業務負担が低減された。また、夜間・休日対応が3名体制から4名体制となったことで業務負担が低減された。来年度は、全員が更なるスキルUPできることを期待する。

臨床工学室

室長 西 伸大



【令和7年度職員】（令和8年3月31日付）
臨床工学技士室長／西 伸大（手術室）
臨床工学技士主任／芝 英樹（透析室）、細山田重樹（透析室）
臨床工学技士副主任／上妻友紀（透析・手術室）
臨床工学技士／上妻優美（手術室）、下村和也（透析・手術室）

【令和7年度 年間目標】

1. 医療機器の管理・点検を通し安全な医療を提供する
2. 臨床工学士の業務拡大に対応していく

【実績】

ME 室

- ・医療機器修理・点検依頼対応

院内修理・点検	56件
業者修理・点検	12件
- ・定期点検

人工呼吸器	12台
輸液ポンプ	50台
シリンジポンプ	33台
D C（除細動器）	3台
- ・始業点検、人工呼吸器・I A B P使用中ラウンド
ポンベ室・C Eタンクラウンド など

透析室

- | | |
|-----------------------|--------|
| 透析件数 | 8,937件 |
| ・そのうちIHDF or OHDF | 1,560件 |
| ・R O装置、透析液溶解装置、透析装置点検 | |

H B O（高気圧酸素療法）

- ・治療回数 166回（16件）
外科・消化器内科、整形外科、脳外科、耳鼻科
循環器科、泌尿器科など

手術室

- ・麻酔器、生体監視モニター、電気メス、気腹装置などの術前点検

・術中機械操作作業

- | | |
|-----------------------|------|
| 手術・検査件数 | 977件 |
| 器械出、術中補助 | 148件 |
| 整形外科（人工関節置換、人工骨頭挿入など） | |
| 眼科（白内障レンズ挿入術など） | |
| 脳外科（慢性硬膜下血腫仙穿孔浄術など） | |
| 腎臓内科（内シャント造設術、PTA） | |

- | | |
|--------------------|-----|
| IVUS、IABP、テンポラリー操作 | 31件 |
|--------------------|-----|

【振り返り】

臨床工学室、透析室、手術室、内視鏡室業務に追加でペースメーカー外来業務（月1）、ペースメーカー植込み後の点検業務も増え、ますます仕事量が増加していますが、可能な限り対応しますので、機器等の不具合・疑問があればご連絡ください。

臨床検査室

室長 遠藤 禎幸



【令和7年度職員】（令和8年3月31日付）

室長／遠藤禎幸

臨床検査技師／宮里浩一、加藤友加里、高田忠雄

非常勤技師／荒井伸代

検査助手／鮫島由紀

【令和7年度 年間目標】

○臨床検査技師の増員。

○接遇の向上。

【実績】

○医療安全管理者の取得。

○HbA1c検査機器のメンテナンス講習に参加。

・業者がすぐに来られない場合の緊急対応。

○臨床検査技師育成のための奨学金制度の導入。

・現在、2名進学中。

【振り返り】

今年度は検査件数が年々増加傾向ですが、臨床検査技師および検査助手の増員はできず、さらに常勤臨床検査技師が1名退職。慢性的な人手不足を解消するために、来年度はもっと積極的に検査室の増員を行っていきたいと思います(検査助手、アルバイトも含む)。

当院は離島というハンデがあるため、院内で実施可能な検査はできるだけ取り入れるようにも力を入れています。また、検査結果を迅速に報告できるよう、今後も検査室一同頑張っていきたいと思います。

栄養管理室

室長 渡邊 里美



【令和7年度職員】（令和8年3月31日付）
 管理栄養士／渡邊里美、瀬下歩、榎本陽葉理
 南 美空
 栄養士／進藤日向子、迫田さくら
 株式会社LEOC（給食委託会社）
 管理栄養士／園山千里
 栄養士／穂満景子、中元心々明
 調理師／濱川スミ子、鳥里寿子、吉岡智昭
 調理員／前園秀一、國浦郁代、バカンレイモン、
 タベラオジェレミー、アイングアルヴィン、
 レビットジャノ、長野育子、鳥里朱美、赤澤明美
 洗浄／川野由美子、河内浩二、松下次男

【令和7年度 年間目標】

1. 医療事故の防止に努める。
 - ・アクシデント発生予防。
 - ・インシデントLv:0報告を増やす。
 - ・食物アレルギー登録に関するマニュアルの周知を他職種に図る。
（特にアレルギー登録漏れの対策を講じる）
2. 業務改善を図る。
 - ・外来に管理栄養士を配置して外来栄養指導の増加を図る。
3. 食器の破損を減らす。
 - ・食器類の破損を昨年より減らす。
（経年劣化は除く）

【実績】

院外活動 11.12

令和7年度難病患者及び小児慢性特定疾患児等の交流会（炎症性腸疾患）に係る講師派遣。

【振り返り】

- ・今年もアクシデント発生件数ゼロを達成した。
- ・インシデントLv:0報告は前年度より1件増えた（7件→8件）
- ・食物アレルギー登録は、カルテの入力場所の違いや、病院食提供後に患者様からの自己申告（入院時の確認では食物アレルギーなしだったが、あとから思い出したとのこと）が数件あった。入力間違いについては、その都度関連部署へ情報共有を行っている。一方、病院食提供後の患者様からの自己申告を未然に防ぐことは難しく、今後の課題である。
- ・関連施設の糖尿病外来開始に伴い、9月から管理栄養士1名の派遣を開始した。継続的に地域の方と関わることができるため、今後も役割を果たしていきたい。

【感想】

- ・インシデントLv:0報告は前年度より1件増えたが、個々人が積極的に記載するまでには、まだ時間がかかりそうである。その都度の声かけは、引き続き行っていく。
- ・今年度は2名増員したため、引き続き、より迅速かつ細やかな栄養管理を行う体制づくりに努めていく。

リハビリテーション室

部長 理学療法士 早川 亜津子



リハビリテーション部門では、本院・介護老人保健施設 わらび苑・本院訪問リハビリテーション事業所、訪問看護ステーション野の花、田上診療所訪問リハビリテーション事業所に療法士を配置し、リハビリテーションを提供しています。

今年度は新たに理学療法士（以下、PT）2名、作業療法士4名が入職しました。遠くは、北海道、栃木県、宮崎県から当院に就職し共に学び成長し、患者様が種子島で少しでも笑顔で暮らせるように取り組んでいます。

本院リハビリテーション室の特徴のひとつは全病棟365日リハビリテーション介入です。予想しない怪我や発症に1日でも早く対応できるよう体制を整えております。また、部門の特徴としては急性期から回復期、生活期（わらび苑や訪問リハビリテーション含む）のトータルリハビリテーションを実践しています。

【令和7年度 年間目標】

「専門家として問題解決ができる自立心と責任感を育むリハビリテーション部」

専門家は様々な知識や経験、技術を活かして問題解決や意思決定を支援する役割を果たすとともに、専門家として日々、問題解決をしなければならない場面があります。その場面で、専門職として多職種と協力しながら問題解決への動きができる自立心と専門家としての責任感を部門全体として支援し育んでいくことを目標としました。

専門家として患者様を担当させていただくことに対する大きな責任感と、問題点に対し結果を出していくことや問題解決のために教える行動力は、先輩療法士から引き継がれることも多々ありますが、部門内教育係を中心としたシステムも若いスタッフ育成に繋がっていると考えます。

【振り返り】

今年度はPT上梨凌平がリハビリテーション室では初の3学会合同呼吸療法認定士を取得することができました。これまで以上に呼吸器疾患の患者様の理学療法介入により症状改善に努め、他療法士のスキルアップにも尽力してくれることを期待します。

また、スタッフ全体のスキルアップとして鹿児島大学病院の理学療法士 弓場裕之氏を招聘し実技研修会を3回開催しました。若いスタッフが多い当院では関節可動域の改善方法やPNF、促通反復療法について学び、実際の治療介入場面でも指導をいただく機会を得ました。

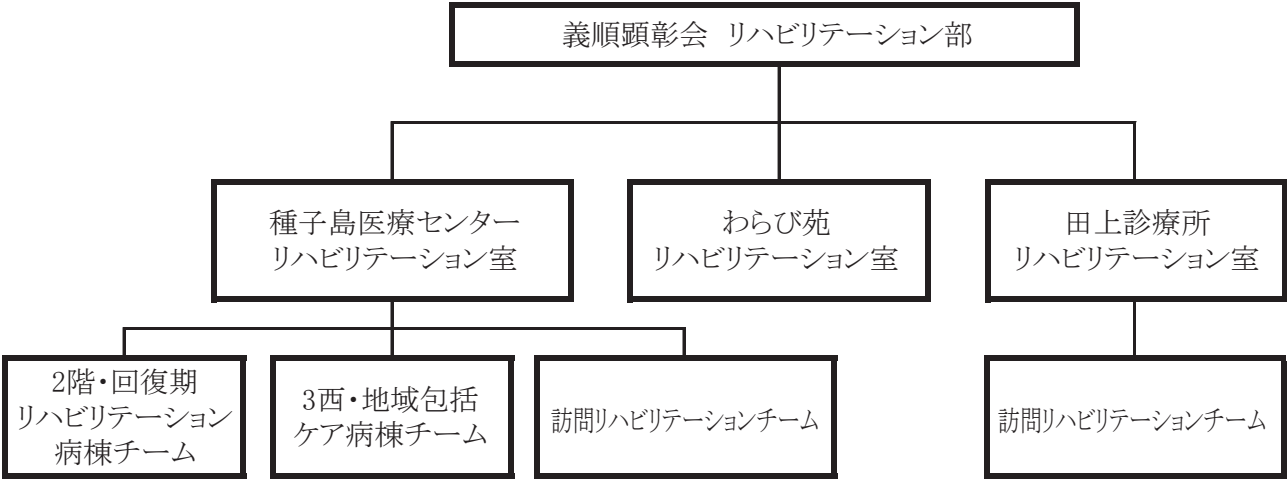


さらに、本院全体の取り組みのひとつである「リハビリテーション・栄養・口腔連携体制加算」を2階病棟で算定開始しました。全国でも9%の施設でしか算定できていない加算算定に取り組みました。早期リハビリテーション介入と栄養、口腔、さらに排泄について医師、看護師、管理栄養士と協働し入院早期から取り組み、患者様が少しでも安心して急性期治療が受けられる体制を構築しています。

種子島は高齢化率も高く、当院は高齢者の周術期リハビリテーションが対象となることが多いです。超高齢の患者様が様々な手術を受け、術後のリハビリテーションに懸命に取り組んでいらっしゃいます。患者様が安全に安心してリハビリテーションが受けられるよう他部門と連携し、部門内としては療法士育成に引き続き尽力していきたいと考えます。

今後も「種子島医療」の一翼を担うリハビリテーション部門であり続けます。

組織図 (令和7年4月1日～令和8年3月31日)



部長	理学療法士	早川亜津子
室長	作業療法士	酒井宣政
主任	理学療法士	山口純平
副主任	理学療法士	小川哲哉
副主任	理学療法士	内村寿夫
副主任	作業療法士	川畑真由子
副主任	作業療法士	上野 瞬
副主任	言語聴覚士	松尾あやの

理学療法士	門脇淳一	作業療法士	西 愛美	言語聴覚士	和田楓貴
理学療法士	大坪正拓	作業療法士	渡瀬めぐみ	言語聴覚士	長田和也
理学療法士	宿利佳史	作業療法士	大田巧真	言語聴覚士	入江色葉
理学療法士	畠本裕一	作業療法士	市来 鈴	言語聴覚士	岩澤侃汰
理学療法士	大津留麻子	作業療法士	埜 京夏	言語聴覚士	北上瞭歩
理学療法士	末吉優紀乃	作業療法士	射場純香		
理学療法士	向井大輔	作業療法士	市来政樹	助手	長野豊子
理学療法士	馬場健大	作業療法士	江口香鈴	助手	吉永 舞
理学療法士	入江宣圭	作業療法士	一葉茜音	助手	岩元真美
理学療法士	遠藤 樹	作業療法士	原崎響輝		
理学療法士	古田菜々子	作業療法士	山田琉奈		
理学療法士	浜崎夏帆	作業療法士	野下誠真		
理学療法士	平田翔梧	作業療法士	関 咲夕紀		
理学療法士	大木田晃紘	作業療法士	大沼優斗		
理学療法士	上梨凌平	作業療法士	庄田圭太郎		
理学療法士	弓場海結				
理学療法士	藤田 優				
理学療法士	森内初香				
理学療法士	小谷流風				
理学療法士	今和泉仁心				
理学療法士	園田拓海				
理学療法士	高橋優人				
理学療法士	横倉滉大				
理学療法士	諸隈恭介				

チーム紹介

急性期病棟(2階)・回復期リハビリテーション病棟(4階)チーム

リハビリテーション室 主任 理学療法士 山口 純平

【令和7年度職員】(令和8年3月31日付)

室長／酒井宣政

主任／山口純平 副主任／松尾あやの

理学療法士／畠本裕一、大津留麻子、向井大輔、遠藤 樹、古田菜々子、上梨凌平、弓場海結、藤田 優、小谷流風、今和泉仁心、園田拓海、高橋優人、横倉滉大、諸隈恭介

作業療法士／西愛美、大田巧真、射場純香、原崎響輝、野下誠真、大沼優斗、関咲夕紀、庄田圭太郎

言語聴覚士／和田楓貴、北上瞭歩

【令和7年度 年間目標と行動プラン】

1.食事・排泄・おしゃれにこだわる

ADL面において、特に『食事・排泄にこだわる』ことを目標としました。急性期病棟から、食事を自分の口で食べること、排泄動作をトイレで行うことをできる限り行うことで、ADLの早期拡大を目指します。これにより、回復期リハビリテーション病棟へ転棟後も継続したADLを行うことができ、早期退院が実現できるようにしていきます。

また、患者様の社会的な関わりも含めた目標として、『おしゃれにこだわる』を挙げています。これは患者様が病室から出ることは社会的な場に出るということであると、セラピスト自身が認識を持ち、患者様のおしゃれや身だしなみを気にすることを目標としました。

【チームの振り返り】

令和7年度目標に対して、中間・最終評価として自己評価アンケートを行ったところ、おしゃれや身だしなみを気にすることが実際にできたという結果でした。また、年間目標である、専門家として問題解決ができる自立心と責任感を育むという目標に関しては、前年度から実施しているリーダーとのカンファレンスや居宅訓練カンファレンスを継続しました。リーダーがカンファレンスを通して、PT・OT・STの専門性をより高めるように取り組むことができました。

今年度は前年度に引き続き、急性期病棟(2階)ではリハビリテーション・栄養・口腔連携体制加算を算定しており、入院時にリハビリテーション、栄養面や嚥下状態も含めたカンファレンスを行い、主治医、看護師、管理栄養士との連携を行うことが継続できました。

この一年を通して、チームメンバーが専門家としての力を発揮しながら、より専門性を高めることができました。今後も問題解決できる自立心や専門家という責任感、そして専門性をより高めることでより質の高いリハビリテーションの提供に繋がっていくと考えます。

チーム紹介

急性期病棟(3F西)・地域包括ケア病棟(3F東)チーム

リハビリテーション室 副主任 理学療法士 小川 哲哉

【令和7年度職員】(令和8年3月31日付)

副主任／小川哲哉

理学療法士／門脇淳一、大坪正拓、平田翔梧、森内初香

作業療法士／市來政樹、江口香鈴

言語聴覚士／長田和也

【病棟紹介】

急性期病棟(3西)

呼吸器疾患・循環器疾患・代謝性疾患・消化器疾患などの患者様を中心にリハビリ介入を行っております。

地域包括ケア病棟(3東)

在宅復帰に向けたリハビリテーションや生活指導の実施、住み慣れた地域での療養(在宅や一部の介護施設への復帰)をサポートする病棟です。

【令和7年度 年間目標】

○リハビリテーション部門目標

「専門家として問題解決ができ、自立心と責任感を育むリハビリテーション部」

○チーム行動目標

「各療法目標を具体的に設定する」

入院時や転入時にPT・OT・STそれぞれの目標を具体的に設定し、退院時に効果判定を実施しました。

【振り返り】

令和7年度はリハビリテーション部門目標である「専門家として問題解決ができ、自立心と責任感を育むリハビリテーション部」を達成するために、チーム目標として「各療法目標を具体的に設定する」としました。今年度、この目標を設定した意図としてPT・OT・STそれぞれの職種が責任感と専門性を持って患者様に関わっていきたいということがありました。そして、患者様が退院時には目標設定が適切だったのか、関わり方はどうだったのかを、自身で振り返る機会を設けることで、目標設定とその関わり方に良い変化が出るのではないかと期待しました。また、各療法の目標を電子カルテの記録に記載することで、関わる職種みんなに目標を知ってもらうことも狙いとしてありました。

年間を通して成長し年度末には、目標の達成率60%以上を目標にしておりましたが、実際にはなかなか難しく、初期に立てた目標を実際に達成できたものは20%程度となってしまいました。

3F西病棟や地域包括ケア病棟の患者様はリハビリテーション介入することで、必ずしも元気になるものではありません。もちろん、可能であれば身体機能の向上や入院前の日常生活動作の再獲得を目指していきたいですが、現在の身体機能を何とか維持する、身体機能の低下を遅らせることも目的となってくる場合もあります。そういった点での目標設定や予後予測は難しくなってくるのだと改めて感じました。

一方で1年間を通して、チーム行動目標に取り組んできたことで、様々なケースの患者様に対しても落ち着いて対応できるメンバーへ成長したなということも感じました。現状に満足せず、島民のために専門職としての自立心と責任感を今後も発揮していけるチームにしていきたいと考えております。

リハビリテーション室活動紹介

リハビリテーション室 副主任 理学療法士 小川 哲哉

リハビリテーション室では、院外の研修会や学会に積極的に参加するなど、さまざまな活動を行っています。今年度の活動報告については、こちらのQRコードからご覧いただけます。



・「たねザップについて」

リハビリテーション室副主任 理学療法士 小川哲哉

・「3学会合同呼吸療法認定士取得について」

リハビリテーション室 理学療法士 上梨凌平

・「第34回鹿児島県作業療法学会に参加して」

リハビリテーション室室長 作業療法士 酒井宣政

リハビリテーション室 作業療法士 山田琉奈・原崎響輝

・「鹿児島県理学療法士協会2025年度第1回種子島・屋久島地区症例検討会に参加して」

リハビリテーション室 理学療法士 入江宣圭・藤田 優

・「鹿児島県言語聴覚士会鹿児島地区ポイント取得対象症例研究発表会に参加して」

リハビリテーション室 言語聴覚士 北上瞭歩

療法士 修了証一覧(令和8年3月現在)

職種	名前	受講年月日	内容
PT	早川亜津子	2025.3.11	鹿児島県地域糖尿病療養指導士 認定書(2025年4月1日～2029年3月31日)
		2025.10.4	第6回医療事故調査・支援センター主催研修 受講証
PT	山口純平	2025.11.16	厚生労働省「がん等の診療に携わる医師等に対する緩和ケア研修会」修了証書
PT	小川哲哉	2025.7.13	第22回藤田ADL講習会ーFIMを中心にー 応用・経験者コース 受講証明証
PT	古田菜々子	2025.7.9	厚生労働省医政局 第1414回臨床実習指導者講習会 修了証
PT	浜崎夏帆	2025.7.9	厚生労働省医政局 第1414回臨床実習指導者講習会 修了証
PT	平田翔梧	2025.7.9	厚生労働省医政局 第1414回臨床実習指導者講習会 修了証
PT	上梨凌平	2026.1.7	ライフ・プランニング・センター「がんのリハビリテーション研修」修了証
		2026.2.1	3学会合同呼吸療法認定士認定証
PT	藤田 優	2025.11.16	厚生労働省「がん等の診療に携わる医師等に対する緩和ケア研修会」修了証書
		2026.1.7	ライフ・プランニング・センター「がんのリハビリテーション研修」修了証
PT	小谷流風	2025.11.16	厚生労働省「がん等の診療に携わる医師等に対する緩和ケア研修会」修了証書
OT	酒井宣政	2025.8.19	社会福祉法人鹿児島県社会福祉協議会 相談支援従事者初任者研修(講義部分)受講証明書
		2025.11.19	社会福祉法人鹿児島県社会福祉協議会 児童発達支援管理責任者基礎研修修了証書
OT	射場純香	2025.7.6	厚生労働省医政局 臨床実習指導者講習会修了証書
OT	市來政樹	2025.11.17	一般社団法人 鹿児島県理学療法士・作業療法士・言語聴覚士連絡協議会主催 2025年度地域ケア会議推進リーダー研修会 修了証書
		2025.11.16	一般社団法人 鹿児島県理学療法士・作業療法士・言語聴覚士連絡協議会主催 2025年度介護予防推進リーダー研修会 修了証書
OT	江口香鈴	2025.7.23	厚生労働省医政局 臨床実習指導者講習会修了証書
OT	山田琉奈	2025.11.17	一般社団法人 鹿児島県理学療法士・作業療法士・言語聴覚士連絡協議会主催 2025年度地域ケア会議推進リーダー研修会 修了証書
		2025.11.16	一般社団法人 鹿児島県理学療法士・作業療法士・言語聴覚士連絡協議会主催 2025年度介護予防推進リーダー研修会 修了証書
		2026.1.7	ライフ・プランニング・センター「がんのリハビリテーション研修」修了証
OT	大沼優斗	2025.11.16	厚生労働省「がん等の診療に携わる医師等に対する緩和ケア研修会」修了証書
		2026.1.7	ライフ・プランニング・センター「がんのリハビリテーション研修」修了証
ST	松尾あやの	2025.11.16	厚生労働省「がん等の診療に携わる医師等に対する緩和ケア研修会」修了証書

2025年度 理学療法学科実習生受け入れ一覧(令和8年3月現在)

神村学園専修学校

R7.4.14～6.7 理学療法学科臨床実習 1名

福岡医健・スポーツ専門学校

R7.6.30～8.30 理学療法学科臨床実習 1名

阪奈中央リハビリテーション学院

R7.10.6～12.2 理学療法学科臨床実習 1名

福岡医健・スポーツ専門学校

R8.1.26～2.21 理学療法学科臨床実習 1名

地域医療連携室

室長 坂口 健



【令和7年度職員】(令和8年3月31日付)

《室長》社会福祉士／坂口 健
 《主任》社会福祉士／加世田和博
 社会福祉士／岩澤あかり
 社会福祉士／荒井未和
 入退院支援看護師／上妻智子

【令和7年度 年間目標】

① スムーズな入退院支援を目指す

▽入院早期より情報収集の充実
 ▽地域の医療、介護、行政等と連携の充実

② がん相談支援センターの充実

▽鹿児島県がん相談支援部門会への参加
 ▽がん相談支援センターの周知向上を図る

【実績】

▽相談件数 (件)

R7 年度	入院	外来
4 月	736	91
5 月	711	83
6 月	671	75
7 月	640	126
8 月	587	103
9 月	619	105
10 月	682	116
11 月	595	91
12 月	606	115
1 月	634	116
2 月	564	95
3 月	661	128
合計	7,706	1,244

▽①入退院支援加算1(算定件数)

②介護支援等連携指導料(算定件数)

(件)

R7 年度	①	②
4 月	110	16
5 月	109	17
6 月	99	18
7 月	116	17
8 月	91	28
9 月	124	26
10 月	107	26
11 月	104	26
12 月	105	16
1 月	96	22
2 月	102	21
3 月	113	21
合計	1,276	254

【振り返り】

毎朝、前日に入院した患者に対してスクリーニングを実施。退院困難な要因の把握、介護認定受給者に関しては、ケアマネジャーや施設へ入院時連絡、ケアプラン等の取り寄せを行い、入院前の患者の状況把握、退院支援計画の早期立案に努めた。

また、随時関係機関と情報共有、情報提供を行い、必要時には退院前サービス担当者会議を実施した。

島内外の医療機関との転院調整や受診調整等に関してもスムーズに調整できるよう取り組んだ。

がん相談支援センターの活動として、合同研修会や相談支援部門会、がん患者会イベント、西之表市健康フェスタ、九州がん相談支援フォーラムは今年度は鹿児島県が担当であり参加を行った。

定期的な各関係機関への訪問、広報誌の作成も継続している。

クラーク室

室長 榎本 祥恵



【令和7年度職員】(令和8年3月31日付)

室長／榎本祥恵 外来主任／日高明美 入院主任／池下由紀 クラーク／園田由美子、阿世知修子、峯下千代子、濱元桃子、山口聡美、橋本郁美、武田まゆみ、折口ゆかり、中脇ルミ、中野 唯、酒井弘衣、小倉由理子、大田清美、稲森奈南、柳 莉乃

【令和7年度 年間目標】

- 1.知識の向上と技術の向上に努める
 - ◎医師、看護師その他スタッフとの連携を強化
 - ◎接遇の向上(挨拶・言葉遣い・身だしなみ)
- 2.活気ある働きやすい職場環境づくり
 - ◎残業の減少と昼休みの取得へ取り組む
 - ◎計画的な年次休暇の取得
- 3.効率的な業務を行う
 - ◎業務改善を図る
 - ◎他部署と協力し、待ち時間短縮に努める

【実績】

担当診療科：内科・循環器・外科・小児科・整形外科・脳神経外科・耳鼻咽喉科・皮膚科・泌尿器科・眼科・心療内科・消化器内科・呼吸器内科・神経内科・糖尿病内科 15診療科担当(全26診療科)

- ◎毎月クラーク会開催
- ◎診療記録への代行入力
- ◎電子カルテシステム入力(検査オーダー・診察予約等)
- ◎診断書などの文書作成補助 総件数：1,354件
- ◎主治医意見書作成 総件数：909件
- ◎医療上の判断が必要でない電話対応
- ※医師指示のもと行っております。

資格取得：ドクターズクラーク

取得人数：11名(令和8年3月現在)

榎本・日高・池下・阿世知・濱元・中脇
中野・酒井・山口・橋本・柳

医師事務作業補助者として、主に医師業務の中の事務的な補助を担当しています。看護師不足のため、各診療科では、処置不要な診療科は医師の指示のもと、医師・クラークで外来診療を行っています。1人1診療科とはいかず、併科で担当しています。診療では代行入力、診断書作成を行い、医師の業務負担軽減につながっています。

【振り返り】

今年度は、職員の入れ替わりはなく、人員不足のままでしたが、少しでも業務がスムーズに行くようお互い意見を出し合いながら改善策を提案し、他部署との連携を行うことができました。残業は前年度に比べ比較的減少傾向にありました。年次休暇に関しては、前年度に比べてまんべんなく取得できたと思います。

また、医師・他部署スタッフとのコミュニケーションをとり、業務に支障がないよう皆で協力しながら取り組みました。今後も皆で意見を出し合いながら協議し、業務がスムーズに行えるよう努力してまいります。

【感想】

今年度いっぱい長年勤めていただいたパートさんが退職となりました。どこの診療科にも対応できる方でしたので、今後その方の穴埋めは厳しくなりますが、皆でカバーし協力しながら業務に取り組んでいきたいと思っています。

事 務 部

総務課

総務課 総務人事 主任 串間 さくら



【令和7年度職員】（令和8年3月31日付）

事務長／白尾隆幸 総務課長兼任広報企画課長／飯田雄治 医局事務：係長／上原きよみ、迫田雅代

総務・人事：係長／渡瀬幸子、能勢綾乃、主任／串間さくら 経理：係長／森永隆治 施設警備：主任／濱田純一 施設設備：施設整備係長兼任用度管理室課長／塩崎光治、主任／奈尾武志、副主任／一葉朋哉 用度管理：山田利恵、榎元優子

【令和7年度 年間目標】

2025年度総務課は義順顕彰会の運営理念に沿って、医療スタッフを支えるとともに、安定した病院運営を行う役割を担うため、次の3点を目指しに掲げ取り組みを行った。

1. 事務職員として専門性を高め、組織力を強化します。
2. 収入の確保、費用の縮減による安定的な健全運営を推進し、業務の効率化を図る。
3. DX医療への取り組み、ペーパーレス化への転換を積極的に導入する。

【振り返り】

昨年4月から勤怠管理システムを導入し、本年度よりわらび苑と診療所でも実施を開始した。各部署や事業所で始業・終業時間が違うため、給与計算時には毎度確認の必要があるが、一年を通して、確認作業も慣れてきたように思う。

また、11月には労務管理システムを導入し、給与システムから在職・退職の全職員情報を抜き出し、登録する作業は大変だった。

職員の登録が終わり、次の段階は“給与明細を電子化すること”。そのため、まずは職員を労務管理システムへ招待を行うこととなった。

登録された職員情報から、在職の職員のみを対象に招待をかけるのだが、こちら側で初期パスワードの登録が必要であり、在職の職員全員約450人分の入力はまだ大変ではあったが、無事に招待も完了し、明細を電子化することができた。賞与は明細項目が少なく、給与システムよりデータを加工し、取り込むことで、実際に令和7年12月の賞与より明細を電子化することができた。

現在は、給与データを加工し、取り込んだ後の作業で、賞与より給与明細は格段に明細項目が多いため、大変苦戦しているが、勤怠管理システムのように回数をこなして慣れていくものだと感じている。

実際に明細を確認した際、今まで紙の明細を出力し、封筒に折り込み、各部署へ配布していたことを考えると、格段に他の業務に使える時間が増え、ペーパーレス化にも繋がっていると感じている。

社会保険の手続きに関しても、退職や育児休業申請・各種給付金（育児休業給付金等）の請求手続きも行えるため、進捗状況の確認などもすべてシステム上で管理できるため、格段に業務効率が上がっていると感じている。

本年度の目標の一つに、DX化とペーパーレス化を掲げており、次年度も労務管理システムより人事・労務分野でのDX化に取り組み、事務職員として専門性を高め、現在、人員不足で大変ではあるが、更なる業務効率の向上を目指し、医療現場の職員の皆さんの支えとなれるよう、一層の努力をしていきたい。

医事課

課長 赤木 文



【令和7年度職員】（令和8年3月31日付）

医事課長／赤木 文 入院医事主任／福山龍巳
 外来医事主任／長野加奈子 外来医事副主任／
 長野さゆり 入院医事常勤／小脇宏之、加藤初美
 外来医事常勤／児島佑奈、藤田ひなの、中村真
 帆、東園清志

外来医事非常勤／今西李奈、日高智佐美、
 古賀奈那海、竹之内麻良、春村充代

予約センター／馬越小百合、西村智子、深田育代
 フロアスタッフ／松元尚美、大迫けい子、赤木七
 海、海野すみれ

【令和7年度 年間目標】

1.患者満足度の向上

① 患者サービスの向上、接遇の強化に力を入れる。

◎ご意見箱苦情 0件

② ダブルチェック、指差呼称確認を徹底する。

2. 安定した診療報酬請求

① レセプト査定率の減少・返戻の減少に努める。

◎一時査定率0.2%以下を目指す。

3. 人材育成の強化と専門知識の向上。

◎月1回の内部勉強会の開始。

◎資格取得を目指す。

【実績】

- ・昨年度に引き続き診療報酬に関する勉強会を開催した。今年度は診療部門ごとの個別で勉強会を開催し、各診療部門に関連した診療報酬の内容で専門知識の向上に努めることができた。
- ・レセプト点検業務では課題となっていたA査定（病名なし）の減少に努め、また救急管理加算査定率減少を目指し医師との連携を図った。

【振り返り】

今年度は退職者が多く、今までにない人員不足が深刻となった1年であった。そのため業務内容の見直しや業務の簡素化に向け取り組んだが、まだまだ今後の課題は多い。人員確保も大きな課題の一つとなりそう。診療報酬請求に関しては、部署ごとに開催した診療報酬勉強会により診療部門の方々と一緒に深い知識を習得できたことで、今後の診療報酬取得に向け連携を図ることができた。

広報企画課

主任 竹田 英子

【令和7年度職員】（令和8年3月31日付）
広報企画課長／飯田雄治 主任／竹田英子
姫野ナル（プロテニスプレーヤー）

【令和7年度 年間目標】

種子島医療センターを広く知っていただくことを目標に、ホームページや広報誌、SNSなどを通じた広報活動を行っています。

今年度は、ホームページの利用者増加やリクルートサイトからのエントリー増加を目標に、職員採用の強化に取り組みました。また、種子島医療センターの理念や業務、活動内容について、島民の皆さまだけでなく島外の方々にも理解・共感していただけるよう、PR活動を行いました。

【実績】

●ホームページの機能強化

患者さんや求職者の方々に、より使いやすく利用していただくための機能整備を実施。

- ・医師紹介のリニューアル。
- ・患者さんの症状に応じた診療科を検索できる「症状別診療科検索」機能の構築。
- ・問い合わせ件数の軽減を目的とした、患者さん向け・採用向けに分けた「よくあるお問い合わせ」ページの制作（2026年度完成予定）。
- ・病院公式LINEとの連携。

●職員採用および病院への理解・信頼強化

- ・公開講座や職員インタビューなど、トピックス記事の制作・更新。
- ・新卒求人受付サイト「キャリアスUC」「キャリアマップ」「求人受付NAVI」へ、一部職種を除く2026年卒向け求人情報、看護師求人サイト「マイナビ看護学生」への求人情報の登録。
- ・病院オリジナル紙バッグの制作。
- ・神村学園看護学生向け病院説明会、および「マイナビ看護学生説明会（熊本会場）」のサポート。
- ・月ごとのホームページアクセス解析データの報告。
- ・産経新聞（九州版／2026年2月21日掲載）への病院広告掲載。
- ・ホームページ差し替え用写真および新規病院パンフレットの撮影、制作に着手。



産経新聞九州版2026年2月21日掲載

●年報誌『飛魚』編集作業マニュアルの見直し

初めて編集作業に携わる担当者とともに、マニュアルに沿って作業を進めながら、問題点の修正・改善を実施。

【振り返り】

ホームページおよびリクルートサイトへのアクセス数は昨年度より増加しており、新規ユーザー数は月平均5,000件、トップページの閲覧数は月平均6,000件となっています。また、鹿児島県内に加え、東京都からは毎月1,000件以上、大阪府から約500件、北海道から約200件、さらに千葉県、広島県、愛媛県、京都府などからも100件を超えるアクセスがあり、全国的な認知度向上がうかがえます。

リクルートサイトからのエントリー数も増加しており、今年度はWEB面接10名、WEB説明会4名（看護師新卒2名、放射線技師学生1名、理学療法士1名）、現地面接5名（看護師既卒1名、メディカルクラーク1名、理学療法士2名、作業療法士1名）を実施しました。

スマートフォンからの問い合わせも増え、気軽にホームページをご利用いただける環境が整ってきています。一方で、その対応にあたっては総務課をはじめ各部署の皆さまに細やかなご協力をいただき、この場を借りて感謝申し上げます。

広報企画課は次年度より、新設される企画推進室へ改変されます。今後はSNSを活用したPRをさらに強化していく予定ですので、引き続きご協力のほどよろしくお願いいたします。

直轄部門

直轄部門

医療安全管理室

医療安全管理者 看護師 田中 加奈



【構成メンバー】(令和8年3月31日付)
 医療安全管理責任者/高尾尊身
 専任医療安全管理者/田中加奈
 医療機器安全管理者/西 伸大
 医薬品安全管理責任者/濱口 匠
 医療放射線安全管理者/川畑幹成
 事務部門担当者/白尾隆幸、塩崎光治、濱田純一
 安全管理室兼務者/酒井宣政、福山龍巳、上妻友紀

【令和7年度目標】

医療安全に対する職員の意識を高め、行動に移すことができる。

【実績】

1. 職員向け院内研修

R7.9	配信	造影検査のリスクマネジメント 講師：画像診断室
R7.11	配信	診療用放射線安全管理 講師：画像診断室
R7.11	対面	指を差す、声にだす ～指さし呼称確認の重要性～ 講師：安全管理室
R8.1	配信	MRI 検査安全対策講習会 講師：画像診断室
R8.2	対面 ズーム	医療安全を支える「ことば」の力 講師：高尾尊身病院長
R8.3	配信	人工呼吸器からの離脱 講師：臨床工学室

2. 医療安全地域連携加算に係わる相互ラウンド

今年度は鹿児島生協病院より3名のスタッフの方が来島してくださいました。

3. 指差し呼称徹底のための取り組み

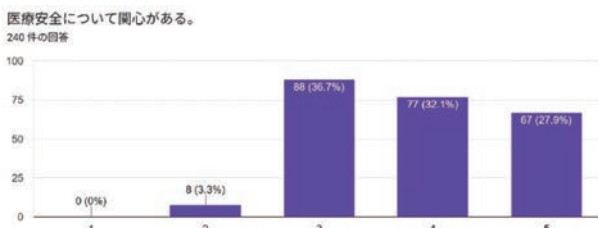
- ・ポスター作製、各部門写真撮影
- ・指差し呼称の研修会運営



- ・各部門へ指さし取り組み対策の提示を依頼
- ・動画作成

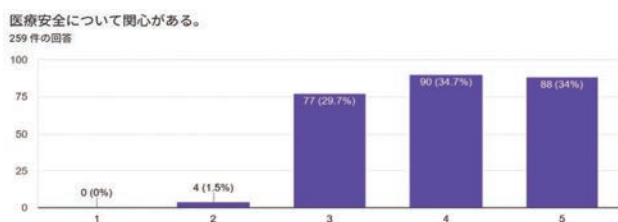
4. 職員への意識調査

第1回令和7年度医療安全意識調査
 (令和6年5月実施 一部のみ記載)



第2回令和7年度医療安全意識調査

(令和8年1月実施 一部のみ記載)



【振り返り】

今年は誤認防止のため、指さし呼称確認定着化に向けた様々な取り組みを実施しました。研修では簡単なゲームやテストを取り入れ、活動の写真や動画撮影を含め実施者や参加者が共に楽しめ、また分かりやすくなるような工夫もしています。意識調査では、「指さし呼称の大切さがわかりました」「指さし呼称をする場面が増えたので継続したい」などの意見が増えており、意識の改善や行動の変容へ繋げることができたと思います。残念ながら定着化には至っていませんが、引き続き推進活動を継続していきます。

感染制御部

感染制御部部长 下江 理沙(感染管理認定看護師/認定看護管理者)



【構成メンバー】(令和8年3月31日付)

感染対策チーム (ICT)

専任医師／病院長 高尾尊身

専任薬剤師／薬剤部主任 濱口 匠

専任検査技師／検査室長 遠藤禎幸

兼任看護師／感染管理認定看護師 谷 英佳

専従看護師／感染管理認定看護師 下江理沙

直下のワーキング活動

:看護部・リハビリ室合同感染リンク会
(NST委員会と兼任かつ、合同開催)

【令和7年度 年間目標】～大項目のみ掲載～

1. 患者背景理解を感染対策へつなげ、手指衛生遵守向上はじめ、感染対策意識向上。
2. 地域の連携施設間と感染症情報の共有と感染対策への意識を高める共同活動。

【実績】～年単位活動～

感染対策向上加算連携活動(会議・新興感染症等訓練)

R7/3/13, 6/12, 10/9, 12/11	熊毛地区医療機関連携感染対策向上加算連携会議
R7/12/9	屋久島保健所感染症地域連絡研修会 “危機管理に備えた地域連携と感染対策”
12/12	西之表保健所合同研修 医療機関社会福祉行政連携新興感染症等訓練
R8/2/26	田上診療所 12/12 振り返り研修

院内集合研修～年単位で開催～

3/25	考えて動く！現場の力で変わる感染対策 演者 下江 理沙
6/3	当院の使用状況から考えるメロペネムの適正使用 演者 濱口 匠
7/22	尿路感染症 国立感染研究所感染症ベーシックレビューコースより 講師 国立国際医療研究センター 後藤 慎 先生 薬剤耐性菌 (ESBL s 産生菌) について学ぼう 演者 遠藤 禎幸
8/9	部署単位の出向き研修 手指衛生タイミングの理解と遵守への取り組み
9/3	マダニと SFTS の理解と感染対策 演者 下江 理沙

【振り返り】

今年は、種子島で初症例かつ2事例のSFTS対応、レジオネラ症とアメーバ赤痢への検査体制の整備、全国的な破傷風トキシソイド供給制限下での対応整備が例年になく重要課題に直面した一年であった。鹿児島県の支援のもと抗HIV予防投薬(PEP)の配置整備ができた。当院のみならず地域全体における血液曝露事象後の安全管理体制構築に向けた大きな前進となる。

日常的な感染対策の質向上については、WHO推奨の多角的戦略に基づく改善活動を継続して実施した。手指衛生遵守率の向上や個人防護具適正使用の徹底など、標準予防策の実践が徐々に定着しつつあり、その成果をデータとして可視化できる段階に至っている。

感染制御部は、設立5年目を終え、6年目を迎える。次年度はさらなる質の向上と組織的成熟を目指し、ICT一丸となって次のステージへ歩みを進めていく。

経営企画改善室

室長 戸川 英子



【構成メンバー】(令和8年3月31日付)
室長/戸川英子 主任/加世田佳子 主任/河野由華
原 照美

【令和7年度 年間目標】

1. 継続した院内外との連携を強化し、広報活動、求人活動、教育講演活動の充実を図る。
2. 院内のニーズに柔軟に早急に対応し、業務の効率化の支援に取り組む。

【実績】

(広報)

- ・公式LINE開始(10月28日配信開始)
- ・外来モニター広報12回更新
- ・西之表市「市政の窓」病院広告12回
- ・インスタ発信継続

(求人)

- ・医療福祉事務学生対象求人サイトへの登録
 - ・看護系専門学校、大学訪問3校
 - ・職業、企業説明会参加2回(島内)
 - ・合同就職説明会出展4回(島外)
 - ・熊毛人材確保事業協力2回
 - ・病院見学受入れ6回(看護部)
 - ・W E B病院説明会7回(看護部)
 - ・奨学生面接1名(看護部)
 - ・入職面接5名(看護部)
 - ・看護学校サテライト教室準備担当
- (その他)
- ・入職祝い金、紹介制度復活の原案策定
 - ・年間休日日数見直しへのデータ提供
 - ・看護部他部署からの依頼の文書ポスター等作成
 - ・ミャンマー特定技能外国人受入れ準備と生活支援
 - ・季節性インフルエンザ集団接種実施
 - ・がん診療連携拠点病院研修事業開催

【振り返り】

3年目となる当室は、イベント開催や広報活動と並行して主に看護部を中心に学生の受入れや院外での説明会等求人活動の拡大を図る中で、スタッフ一人ひとりの役割分担、そして情報共有を合い言葉に取り組めてきたと思う。その中で竹之内副看護部長には看護部の求人活動、看護学校サテライト教室開校準備等対外的な活動も精力的に取り組んでいただき、採用実績につながっている。今後もみんなで改善と発想の視点を大切に、組織から与えられた使命を果たしてまいりたいと思います。引き続き、ご理解とご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

【令和7年度 年間活動紹介】

種子島子どもまつり (5月4日)

沢山の子供たちが聴診器や心臓マッサージ体験等、楽しみながら体験していました。体験後には、風船のプレゼントで、子供たちの笑顔と笑い声が溢れていました。



職業体験学習 (5月27日～29日)



種子島中学校の生徒さん達が、3日間、職業体験学習にきてくれました。自分の希望する部署の見学・体験を通して、院内の様々な医療職を知る機会となりました。職業選択としての第一歩となってもらえたら嬉しいです。

新入職員ランチ会 (5月22日)

2025年度入職した職員を対象に、新入職員ランチ会を実施しました。同期で入職してからの仕事ぶりやそれぞれの思いを語り合ったり、楽しい時間を共有できました。これからはそれぞれの部署で頑張っていくと、絆を深めました。



クリーン大作戦 (ごみゼロ運動) (5月30日)



日頃お世話になっている病院周辺の方々への感謝の気持ちを込めて、5月30日(ごみゼロの日)に、クリーン大作戦を行いました。病院の周りを中心に、みんなで清掃活動できて心もクリーンになりました。

七夕飾り訪問 (めいろうこども園) (7月2日)

めいろうこども園の園児たちが、願いのこもった笹と元気いっぱいの歌声を届けてくれました。職員も患者さんも自然と笑顔になり、心温まるひとときとなりました。



ふれあい看護体験 (7月26日)



30名の中高校生に参加していただき、看護業務の見学や心電図や包帯・車いす体験を行いました。今回の体験を通して一人でも多く看護の道へ進んでもらえると嬉しいです。

鉄砲まつり手踊り (8月24日)

法人、総勢80名で団体手踊りに参加しました。法被やうちわを手し、子供から大人まで音楽に合わせて声を掛け合い、楽しみながら踊ることができました。沿道にいる市民の方の声援も暖かく、嬉しい気持ちになりました。



就業体験学習 (10月1日～3日・22日～24日)



種子島中央高等学校



種子島高等学校

10月に3日間ずつ、種子島高等学校と種子島中央高等学校の生徒さんたちの就業体験学習が行われました。職員や入院患者さんとのふれあいを通して、医療や医療従事者について、沢山の事を学ぶことができたのではないかと思います。

緩和ケア研修 (11月16日)

2025年度もがん診療連携拠点病院事業として地域の医療従事者対象に「がん等の診療に携わる医師等に対する緩和ケア研修会」を開催し、12名の修了生が誕生しました。

引き続きがん患者さんへ質の高い支援ができる人材育成を行ってまいります。



学校訪問 (12月11日・1月29日・2月25日)



一年を通して、島内の中学校・高等学校への訪問をしました。種子島の暮らしを支える職業人座談会・職業講話・地元企業説明会など、学校へ訪問して講話を行いました。直接生徒さん達に話をすることで、医療職への興味・関心をもってもらい、種子島医療センターのことを知ってもらいいい機会となっています。

公開講座(全5回実施)

昨年に続き今年も地域の皆様へ健康情報をお届けする公開講座を開催しました。この場を借りて講師をはじめご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

- 令和7年6月29日
「健康寿命をのばすには？」
循環器内科部長 薮田剛嗣
会場44名、Zoom 9名
計53名参加



- 令和7年7月27日
「整形について」
整形外科部長 堀之内 駿
理学療法士副主任 小川哲哉
会場44名、Zoom 8名
計56名参加



- 令和7年11月30日
「脳卒中のお話」
脳神経外科部長 渡邊章二
会場43名、Zoom 29名
計72名参加



- 令和7年10月20日
「がんのお話」
外科部長 松下大輔
外科医長 庄 亮真
がん化学療法看護認定看護師 山之内 信
会場59名、Zoom 17名
計76名参加



- 令和8年3月1日
「めっかりもうさん高血圧」
理事長 田上寛容
会場61名 計61名参加



システム管理室

副室長 吉内 剛



【構成メンバー】（令和8年3月31日付）
副室長/吉内 剛 主任/鎌田泰史

【令和7年度 年間目標】

1. 電子カルテ及び付随システムの安定稼働
随時新規端末への入替
2. 各種更新作業への対応
チームコンパス導入対応、オンライン資格確認
対応(馬毛島)、電子カルテシステム随時更新

【実績】

1. 電子カルテ及び付随システムの安定稼働
サーバーにおいては、幾度か機器故障やケーブル劣化等のトラブルに見舞われましたが、原因機器の交換等にてダウンタイムの縮小に努めました。クライアント端末は経年劣化により故障が見られ、新規の端末に入替実施しています。
プリンタ・スキャナ等の連動機器についても、障害発生の際に都度適切に対応しています。
来年度に向けては、ネットワーク機器の不調も見受けられ始め、稼働年数もそれなりに経過しているため、機器の大規模更新作業を行う予定です。

2. 各種更新作業への対応

看護部の業務効率向上に向けた取り組みとしてチームコンパスの導入を行いました。システム管理室としてはシステム構築をメインに行い、現在運用中です。

また、馬毛島関連でオンライン資格確認システムも実施しています。今後はカルテとの連携を行う予定です。

【振り返りと今後】

サーバーやネットワークでの障害が期末に数度起き、その都度病院機能にできる限り支障がないよう、他部署とも連携し、対応してきました。これらの対応で問題点(設備、室員のスキル含め)も見えてきました。

来年度には、ネットワーク機器の全更新を予定しているので影響範囲等含め、準備・計画を綿密に練っていきたいと思います。

来年度もできる限りの安定稼働に向け、日々精進していきたいと思います。